

馬形埴輪における騎馬の基礎的研究

南 雲 芳 昭

1 はじめに

筆者はかつて群馬県太田市高林に所在する県立東毛養護学校内古墳出土のいわゆる「人が乗る裸馬」を資料紹介する機会を得たことがある⁽¹⁾。その際にいくつかの類例の存在を知った。馬形埴輪全体からみればきわめて少数でありながらも関東、北陸、東北、九州と各地に確認されている。これはもはや偶然の一致や埴輪工人の手慰み的な次元に留まるものではなく確固とした存在となるはずである。本稿は従来その希少性ゆえにあまり取りあげられることのなかったこれらの資料を集成・紹介し、基礎的なデータを抽出しながらその位置付けを行っていくものである。

なお、馬形埴輪に人物が乗る資料をさして「騎馬」という用語を使用するが、単に「人物が乗る馬形埴輪」という意味で用いるのであって、戦闘的なニュアンスは含んでいないことをあらかじめ明記しておきたい。

2 研究略史

これまで騎馬自体をとりあげて論述されることは少なかったが、触れられた文献類を年代を追って挙げてみたい。管見では1958年松原正業氏が伝茨城県出土資料に触れたのが初出である⁽²⁾。写真を呈示し、鞍さえない馬で人物は調教師のような身分の低い人物を考えている。1960年には伝茨城県出土資料に対して写真掲載と解説がなされ疑問点が呈示されている⁽³⁾。1969年群馬県雷電神社跡古墳の報告があり、1953年に出土していた形象埴輪の中に人物の乗った馬形埴輪が存在することが明らかにされた⁽⁴⁾。1971年には伝埼玉県出土資料と伝茨城県出土資料が紹介され、類例の呈示もなされている。この時伝埼玉県出土資料の人物が背負っているものは眉庇付冑とされた。同時に伝茨城県出土資料に対してはその信憑性に疑問が投げかけられている。同年茨城県丹塚古墳の報告が完結しかつて「騎馬武人」が出土したという証言を伝えている⁽⁵⁾。1974年には1969年に出土した群馬県東毛養護学校内古墳出土資料が写真紹介され6世紀末とされた⁽⁶⁾。1977年水野正好は同資料に貴人の前を駒牽きするさまという解釈を与え、人物を背中に「背当て」をした馬飼いや人とした⁽⁷⁾。この資料について1979年に梅沢重昭は袋を背負った人物が乗っている裸馬と解説し、人物は子供であろうかと述べている。同時に四天王寺宝物館所蔵の伝群馬県出土資料が紹介されている⁽⁸⁾。1979年東毛養護学校内古墳出土資料は巻末一覧表の中で7世紀の年代を与えられている⁽⁹⁾。さらに1980年同資料は子供が裸馬に乗った姿で実際の移動にはこのような馬装が多かったと推定された⁽¹⁰⁾。1984年には福岡県立山山13号墳例が⁽¹¹⁾、1987年には同県鬼の枕古墳例の報告がなされている⁽¹²⁾。同1987年宮崎由利江は裸馬の類例の一部として東毛養護学校内古墳出土資料と伝茨城県出⁽¹³⁾

土資料を取りあげたが紹介のみに留まった⁽¹⁴⁾。同年埼玉県生田塚6号墳例が報告されている⁽¹⁵⁾。1989年埼玉県奥の山古墳例の報告⁽¹⁶⁾があり、同年梅沢重昭は群馬県出土の馬形埴輪のなかで東毛養護学校内古墳出土資料と伝群馬県出土資料に言及し、後者は「葬送の儀式」の参列者の情景を表現したものではなく、「葬送のまつりを行う祭人たちの一員として加えられた」姿であろうと意義づけ⁽¹⁷⁾た。1990年井上裕一は馬形埴輪研究の大綱を示した中で人物が乗る馬形埴輪があることに触れ、各々の埴輪群の中で性格づけをせねばならないと述べている⁽¹⁸⁾。若松良一は同年馬形埴輪に飾り馬・裸馬・騎馬の三態があるとして騎馬を位置づけ、乗っている人物の形状がことさら身分の高い表現ではないことから殯の参列者の姿を表したものと述べた⁽¹⁹⁾。1992年には若松は騎馬の人物部分を人物埴輪の中でも紹介している⁽²⁰⁾。同年南雲芳昭は東毛養護出土資料の補修の際に得られたデータをもとに資料紹介をし、成形技法や馬装の特徴を述べ、何らかの職能を示したものであろうとした⁽²¹⁾。さらに石川県矢田野エジリ古墳例が報告された⁽²²⁾。1993年には東毛養護出土資料は衣服表現のない袋状の物を背負った少年とも思われる人物が乗ると解説されている⁽²³⁾。同年福島県経塚1号墳例が報告された⁽²⁴⁾。また、伝埼玉県出土資料の背負い物については「荷物」とされている⁽²⁵⁾。

1950～1960年代は発掘調査による資料も乏しく存在自体認知され難かった感がある。その背景には埴輪の贋作が横行し信頼に足る資料がなかったことが推測される。そのなかで雷電神社跡古墳の報告で騎馬の存在が確認された意義は大きいといえよう。1970年代以降になると次々と資料が紹介されていったことが看取される。資料的信頼性のある東毛養護学校内古墳出土資料などが博物館の特別展などで人々の目に触れ、かつ発掘調査による類例の増加や馬形埴輪研究の進展にともなってその存在が確実となったのである。

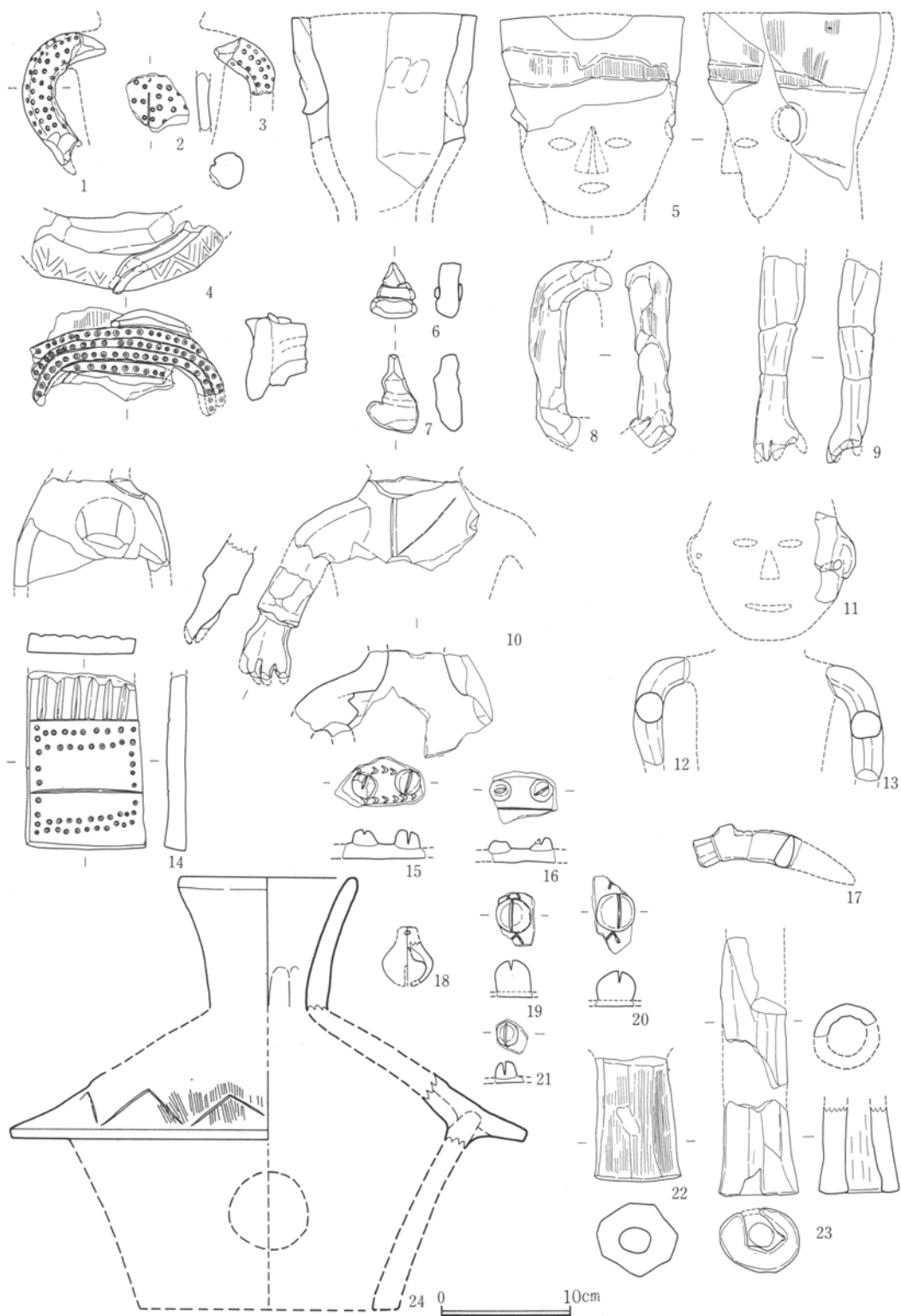
3 資料の概要

鬼の枕古墳⁽²⁶⁾ (第1図) 福岡県甘木市大字菩提寺字山畑

丘陵上に位置する三段築成の前方後円墳で墳丘長は56mを測り、葺石を有している。後円部に張り出しがあり、須恵器が出土している。主体部は大規模な破壊を受けているが巨石を使用した複室の横穴式石室で全長14、2mと想定できる。築造年代は6世紀中葉頃が推定される。

円筒埴輪列は各段テラスに検出された。円筒埴輪は4条突帯が多数を占めるが3条突帯もわずかにみられる。外面は一次調整の縦ハケを施し、内面調整は3パターンが認められる。透孔は突帯間に対をなして穿孔されるが基底部や口縁部に開ける資料も少数ながら認められる。

形象埴輪は人物・馬・家・蓋・武器類があり、大半は後円部最下段テラスより転落した状態で検出された。人物・馬などは石室に向かって右側に配置の中心があり、一部は前方部に配置されていたと思われる。家は前方部墳頂に配置されていたと推定できる。張り出し部からは埴輪は検出されていない。馬形埴輪については馬鈴が報告されている。特に第1図15、16、19～21は胸繫等の馬鈴部分になる可能性がある。獣脚として22・23が挙げられているが、馬形埴輪のものになるか不明である。人物は腕部の破片数から騎馬の人物部分や冠帽の男子を含め少なくとも8個体



第1図 鬼の枕古墳出土形象埴輪実測図 (註13より)

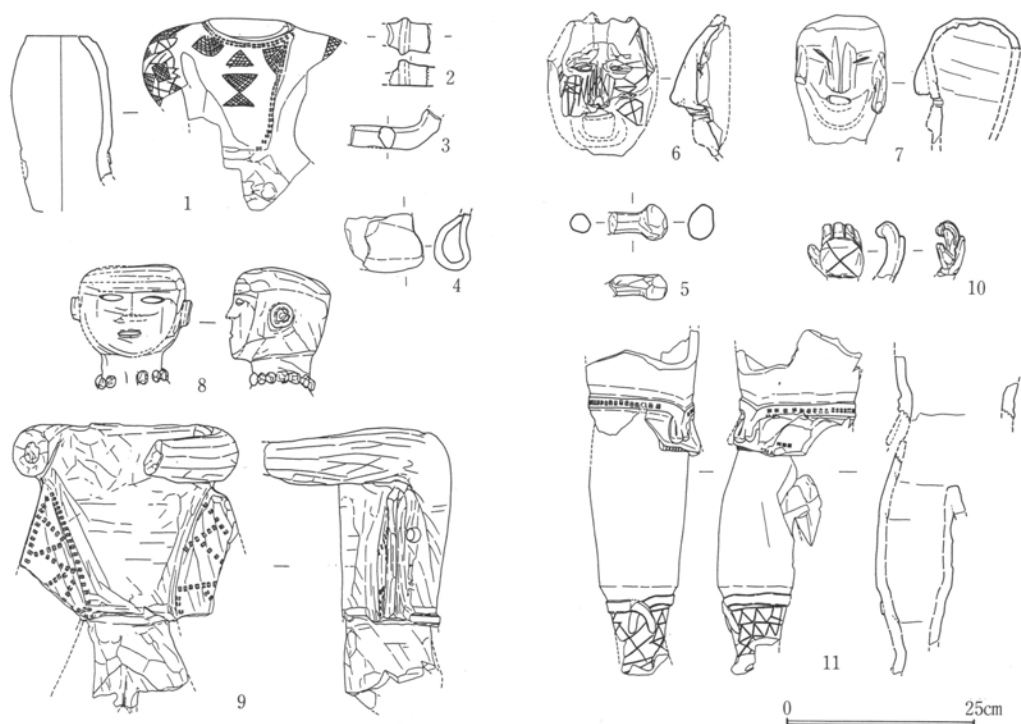
確認できる。騎馬の資料は4の腰部付近の破片が鞍に跨る人物とされるものである。裾部に鋸歯文を重ねており、その上に手綱とされる二本の粘土紐が貼り付けられている。側面には竹管文が4列に施されている。1～3は竹管文を多用して飾られた人物の腕と胴部の破片である。

本墳は甘木・朝倉地域における最後の前方後円墳であるが、前代までの同一系列と考えられる首長墓とは立地が異なっている。さらに磐井の乱後の大和政権の支配体制が確立されたなかでの葺石・埴輪を持つ前方後円墳である本墳の被葬者像は、磐井との関連よりも大和政権とのつながりを強く考えさせる。

立山山13号墳⁽⁷⁾ (第2図) 福岡県八女市大字本字立山

立山山13号墳を包括する立山山古墳群は八女丘陵の東端近くに位置する。古墳群は約40基の円墳と墳丘長46mの前方後円墳である立山丸山古墳、箱式石棺墓5基、石蓋土墳墓4基、木棺墓1基からなっている。古墳群の年代は5世紀初頭から6世紀末までである。遺物では8号墳の垂飾付耳飾りや23・27号墳の古式須恵器、24号墳の陶質土器などが注目される。特に24号墳は主体部の箱式石棺の形態から朝鮮半島との直接的な関係が考えられている⁽⁸⁾。

13号墳は単室の横穴式石室を主体部に持つ径24mの円墳である。MT85古相並行の須恵器が出土している。石室からは耳環、素環の轡鏡板、輪鏝、鞆、鉸具、鉄地金銅張留金具、鋌、靱尻金具、鎌、鉄鏃、不明鉄器が出土している。埴輪は周堀に転落した状態で形象埴輪は石室開口部左



第2図 立山山13号墳出土形象埴輪実測図 (註12より)

右の堀から出土している。意須比着用の女子とその頭部、「鞍に乗る貴人」の他男子の頭部2個体、胴部下半から足結をした左足まで残存する男子全身像の資料がある。

第2図1の「鞍に乗る貴人」は、馬体の破片は出土していない。馬具では4の剥離した壺鐙が認められる。人物は首から胴部、腰部から尻、股間にかけて残存している。腕は左側が肩から欠損し、接合しない腕先端部がある。右腕は肩から先が若干残存している。その形状は腕を前方斜め下に伸ばし、何かを握っているようである。2・5は人物から剥離した頭椎大刀と思われる破片である。人物の腰が椅座の形状を呈しわずかに残る足のつけ根が開いていることから何かに跨った状態であり、しかも馬部分に関する破片は剥離した壺鐙のみである事から馬形埴輪全体を表現したものではない可能性が考えられている⁽²⁹⁾。人物の胴部から腕にかけては内部を斜格子で埋めた三角文及び菱形文のヘラ描きを施している。手は粘土紐で指を表現している。衣服の襟および合わせ目には縫い目の表現がある。冠は完全な復元である。

⁽³⁰⁾ 埼玉奥の山古墳 (第3図) 埼玉県行田市埼玉

奥の山古墳は埼玉古墳群中の中規模前方後円墳で墳丘長67m、周堀を含めると約90mを測る。古墳群中唯一の一重周堀であり、くびれ部近くの後円部に造り出しを有する。

報告された円筒埴輪は胎土・色調・技法・形態からA類とB類に大別され、どちらにも属さないC類が少量見られる。突帯は3条が想定されている。外面は一次調整の縦ハケで透孔は円形である。

形象埴輪はほとんどが古墳整備の過程で造り出し付近の周堀内から採集された破片資料である。騎馬以外の組成は、人物は女子の他琴を弾く男子、武人と推定される右腕、人物から剥離した大刀や刀子・冑の鏃がある。動物では牡鹿頭部、馬の頭部片、馬体から剥離した馬具が見られる。器財では大刀、靱、盾あるいは靱と思われる破片がある。家は寄棟造りと吹き放ちの円柱部の破片が認められる。

騎馬に関する資料は第3図にあげた人物部分の破片がある。6は馬に跨った人物の左足でリボン様の表現が足の途中に見られる。括り緒^{くく}の褌^{はかま}の裾かと思われるが、粘土紐が馬体に続くようでもある。足は馬体に粘土を貼り付ける方法で作られている。破片に向かって左側の端に縦方向のナゲが残り、鐙鞆が垂下していたと推定されている。また、横方向の突帯も見えるが、鞍の下端が障泥上端を表現しているとも考えられる。5は右足で同じくリボン様の表現で褌の裾を示している。左右とも足の甲はリアルに形造られている。1は腰部破片で、復元径は10cmである。2は胴部下半の破片である。馬形埴輪の破片は3があり、眼孔と面繫の一部の破片である。4は馬体から剥離した馬具の破片と思われるが、器財の可能性も残している。

形象埴輪の資料も円筒埴輪と同じ基準でA類とB類に大別できる。騎馬の人物はB類であり、馬形埴輪の方はA類に分けられ、同一個体とはなり得えないようである。騎馬の馬装については不明確といわざるを得ず、鐙、障泥と鞍の装着が推測できる程度である。これら円筒埴輪・形象埴輪のA類は蛍光X線分析の結果から鴻巣市生出塚遺跡の埴輪窯からの供給であり、B類は形態

や技法などから東松山市桜山埴輪窯の製品との類似性が高いといわれている。古墳の築造時期は6世紀中葉とされる。古墳群中の立地関係や主軸方向から、奥の山古墳を含む愛宕山や瓦塚古墳・中の山古墳などの被葬者は稲荷山古墳や二子山・鉄砲山古墳等といった大規模前方後円墳の被葬者の補佐的立場の人物とすることができる。

青山古墳⁽³¹⁾ 埼玉県大里郡大里村青山

比企丘陵の北部の丘陵上に位置する古墳である。西には東松山市三千塚古墳群があり、北には墳丘長約74mの前方後円墳であるとかん山古墳や規模不明の前方後円墳の楓山古墳がある。近接した古墳としては東山古墳という規模不明の前方後円墳が挙げられる。このほかにも付近には小円墳が構築され、古墳群を形成していたようである。

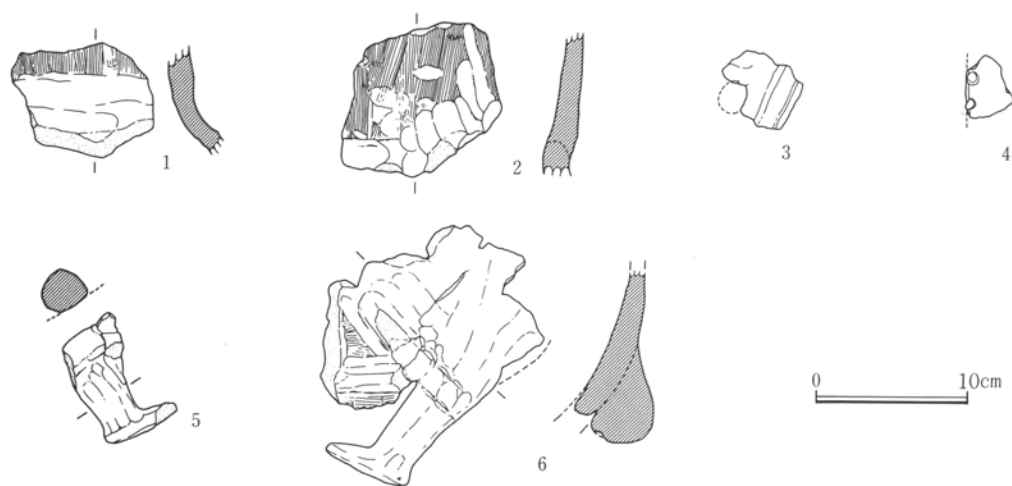
青山古墳は円墳が推定されているが、神社社殿部分が平坦になっており本来帆立貝形を呈するという説もある。円墳とした場合径約90mを測る。墳丘からは埴輪が採集され、低位置突帯の円筒埴輪が確認されている。

騎馬については「新編武蔵国風土記稿」に「曾テ此塚ヲウガチシトキ。石郭アリテ。中ヨリ甲冑馬上ノ塑人五ツ。玉鏡大刀ノ折ナド出セシコトアリ」とみえる。「馬上ノ塑人」が出土したのであるが、文章のつながりから石郭中からの出土と読み取れる。あるいは埴輪ではない可能性も考えられる。古墳の年代は6世紀中葉前後に築造されたと推定されている。

生出塚6号墳⁽³²⁾ (第4図) 埼玉県鴻巣市東3丁目

生出塚6号墳を含む生出塚古墳群はすでに墳丘がすべて失われている古墳群である。発掘調査と絵図からは前方後円墳1基とその可能性の強い古墳1基および5基以上の円墳が確認されている⁽³³⁾。かつては密集した古墳群だったと推定される。また、6世紀中葉～7世紀初頭の操業年代が与えられている埴輪生産址が隣接しており、一部古墳造営と並行期間を持っている。

6号墳は調査区内にかかった周堀1/4弱を調査している。墳丘はすでに削平されているが、円墳



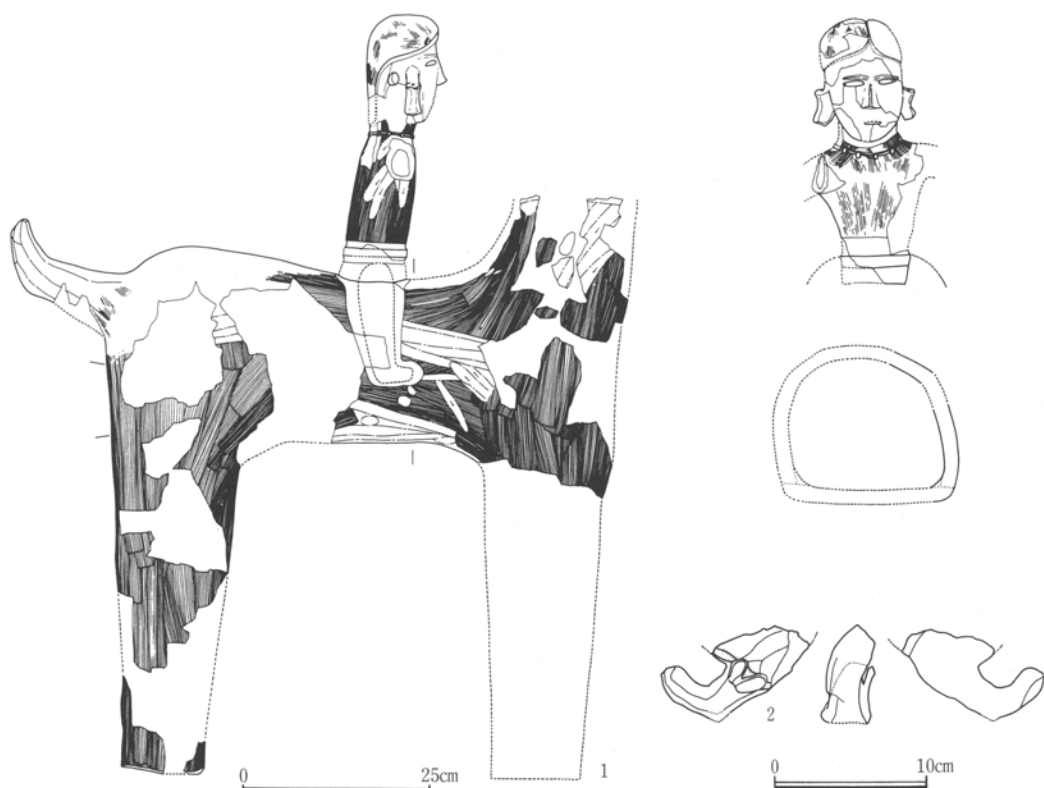
第3図 埼玉奥の山古墳出土形象埴輪実測図 (註(34)より)

と推定され、周堀内径18.4m、外径24mである。かつて調査区東側で住宅建設の際須恵器横瓶とともに河原石が集中して出土したことがあり、これが主体部とみられている。

埴輪はすべて周堀に転落した形で出土している。円筒埴輪は3条突帯で板状工具の押圧による底部調整が施されている。外面は一次調整の縦ハケで、内面にもハケメが多用されている。形象埴輪は騎馬のほかにも別個体の尻繫に三鈴杏葉がつく破片、障泥から尻繫部分の破片、女子嶋田マゲ2個体、人物に付属する大刀破片、人物左腕、馬鈴、馬の耳、障泥、胸繫に付く杏葉などがある。

騎馬（第4図1）は左右前脚から胴部上半、頭部にかけて欠損している。馬脚底面から頸部残存部まで76.3cm、頸部残存部から尻尾まで83.8cmを測る。馬体には鞍や鎧、胸繫・尻繫および杏葉・馬鐸・馬鈴等はいっさい見られない。わずかに頸部に残る粘土貼り付けの指ナデから手綱があったものと判断される。

人物部分は両腕と両足を欠損している。髪は振り分けて後は首まで垂らし、美豆良は上げ美豆良に結っている。首には粘土粒と粘土紐で首飾りを表現している。馬体と腰部の結合部から頭部まで35.4cmを測る。なお、第4図2は左足の破片と思われる。途中で粘土がリボン状に摘み上げられ、さらに向かって左上に粘土が伸びている。それらの縁は赤彩されている。褌の裾の表現で



第4図 生出塚6号墳出土形象埴輪実測図（1.S=1/10 2.S=1/5、註(5)より）

あろう。

成形技法については、脚部は粘土紐の輪積みで、腹部は前後脚に粘土板を橋状に渡している。胴側部は小粘土板を貼り合わせ、尻部は粘土紐の輪積みである。尻尾は粘土板を中空に丸めて取り付け、背部はアーチ状に粘土板を左右に掛け渡して形作っている。この時尻部の透孔から手を入れて内面調整を行っている。頸部は粘土紐の輪積みである。人物は馬体成形ののち輪積みによる別造りの上半身を背に取り付けており、馬体の人物位置には穴はみられない。足は馬体に貼り付けている。

生田塚古墳群の埴輪は隣接する埴輪生産址からの供給が考えられている。

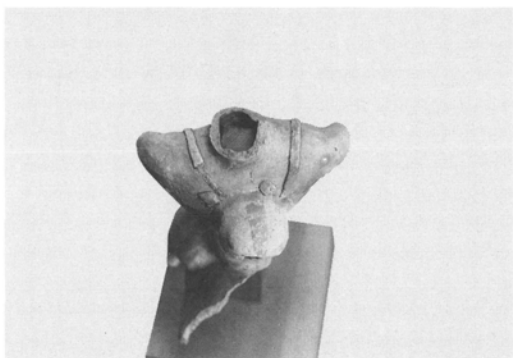
伝³⁴埼玉県出土（写真1） 天理大学附属天理参考館所蔵

本資料は騎馬の人物部分で、頭部および両腕の大部分と右足を欠損している。左腰部から足部にかけて一部馬体が残る。残存高31.2cmを測る。首の部分は残っているが首飾りや垂髪はみられず、剥離痕も認められない。首の右側から右胸にかけて赤彩がわずかに残る。首廻りや胸部分に下げ美豆良の下端の接合痕などは認められない。両腕は肩からわずかに残存し、その所作は前斜め下方に伸びると思われる。残存する腕の径は右4.5cm、左3.5cmほどである。胴部および腰部には何の装飾、衣服の表現は見られない。肩や胸に比べて腰を細く作っており、上半身は逆三角形となっている。腰の前後には鞍橋の剥離痕はない。左足腿の位置には端部が広がった釣り鐘形の禪と思われる膨らんだ表現があり、赤彩による斑紋が施されている。この膨らみは最大幅9cm、長さ5.5～7cmほどで、馬体に粘土を貼り付けている。その膨らみから細い足が下へ8cmほど伸びている。足の甲の長さ6.2cmである。足も馬体に粘土紐を貼り付けて作られている。足はゆるく「く」の字に曲がっており、膝と思われる屈曲部に粘土紐の接合痕がある。内側にみられる馬体との剥離痕以外剥離した痕跡は認められない。

背には何かを背負っている。この背負い物は背との接合部で長さ7.5cm・幅6.5cm、外側の長さ6.5×5.5cmでほぼ円形を呈する。上位の厚さ6cm、下位の厚さ2.5cmを測る。外側頂部には2cmほどの不定形の穴があり、中空に作られていると思われる。上側から板状の粘土が被せられており、穴まで至らずに割れ口を見せている。この粘土がどこまで被せられていたのか判別できなかった。この粘土の中央に幅1～1.5cmほどの赤彩部分が背との接合部から割れ口まで縦方向の線状に伸びている。また、割れ口の上位から右側へ赤彩部分があり、「L」字状を呈している。さらに左側にも赤彩が一部に残っており、逆「T」字形になっていた可能性も考えられる。背負い物は赤彩された紐によって背負われている。この粘土紐は背負い物から両肩を廻って脇の下近くまで残存している。脇腹を廻って背負い物の下につくかどうか剥離痕は明確ではない。左脇下に剥離痕らしき痕跡も見られるが判別できなかった。現存している肩紐の端部は左右とも磨滅気味になっており、割れ口かどうか明確ではない。背負い物から肩へ廻る左右の紐の各々左側に紐状のものが貼り付けられている。肩を廻る紐とつながると思われ、肩紐の端部を表現しているのであろうか。左側のものは赤彩されているが右側のものは赤彩は確認できなかった。また、被せられた粘土の



1. 左前方から



2. 上 面



4. 右側面



3. 前 面



6. 左側面



5. 後 面

写真1 伝埼玉県出土形象埴輪 (天理大学附属天理参考館所蔵) 1. 註(5)より

割れ口中央付近に細い沈線がやや右に傾いてわずかに残っている。ちょうど縦に走る赤彩線の内になっている。この背負い物は眉庇付冑と言われているが最近荷物という解釈もされている⁽³⁵⁾。

馬体部分では、人物の裾広がりの釣り鐘形の褌の下端位置から断面が屈曲している。馬の背を左右にアーチ状にかけ渡す部分の可能性があるが破片のみで明確ではない。人物は下腹部、尻部分で馬体と接合していると思われるが、接合痕は丁寧に消されている。人物は馬体の背に残された穴に巻き上げて成形されたと思われる。腕は中実で粘土棒を差し込む方法である。裾広がりの釣り鐘形の褌と左足は前述の通り馬体への粘土の貼り付けによってできている。背負い物は中空でおそらく粘土紐の巻き上げと推定され、外側の穴は巻き上げた最後の箇所が穴としてそのまま見えていると思われる。

調整については馬体はハケメ後ナデを施している。人物は胴部・腰部はハケメで腕から首にかけてはハケメ後ナデが入っている。内面はナデである。背負い物もナデによって仕上げられている。

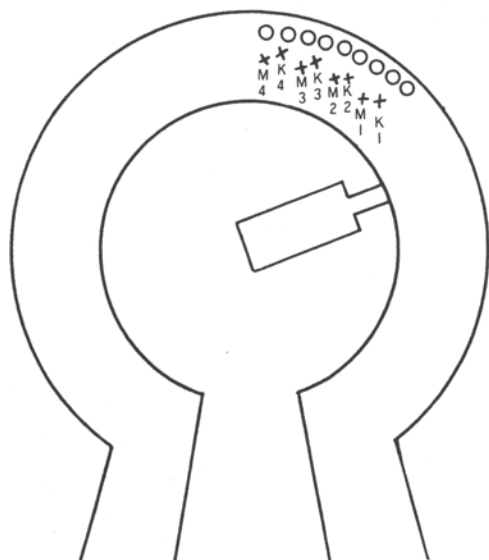
雷電神社跡古墳⁽³⁶⁾（第5図、写真2） 群馬県佐波郡東村大字東小保方字下谷

下谷古墳群中の一基で早川右岸の段丘上のほぼ中央に位置する。墳丘は削平されてしまったため定かではないが前方後円墳で50～66mといわれている。墳丘削平時に石室近くの埴輪配置の一部が記録されている。また、村誌編纂に伴い石室が調査された。

石室は破壊が著しかったが側壁下半部が残っていた。自然石の割れ石を用いた両袖型横穴式石室で、玄室には間仕切り石が検出された。遺物は挂甲小札、大刀破片、刀装金具破片、耳環、金銅製中空丸玉、金銅製金具破片、金銅製馬具破片、鉄製馬具破片、鉄製鉸具、木心鉄張鍔金具破片、鉄製両頭座金付留金具、有茎尖根形鉄鏃、有茎平根形鉄鏃、無茎平根形鉄鏃、須恵器破片の出土をみた。また、かつて盗掘で出土した上記以外の種類として、杏葉、乳文鏡、瑠璃丸玉がある。鍔金具は木製壺鍔に装着されたとみられる。古墳の築造年代は6世紀後半～末葉である。

埴輪は墳丘削平の時に多量に出土し、人物、馬、家が確認されている。基壇外側に円筒列が並び、その内側に形象埴輪が配置されていたようである。石室開口部向かって右側で形象埴輪の配置が確認されている。男子半身像4個体と馬形埴輪4個体がセット関係をなして石室開口部方向から第5図のように並んでいた。このうち3組目の馬形埴輪が騎馬である。1組目の馬形埴輪は馬鐙・杏葉などで飾られ、壺鍔をつけている。2組目の資料は壺鍔であるが1組目の資料より飾りが少なく胸繫・尻繫に円形装飾がつけられている。3組目と4組目の馬形埴輪は詳細は不明であるが1・2組目より小振りであるという。3組目の馬形埴輪の壺鍔には人物の足が装着されていた。さらにこの馬形埴輪破片に混入して頭部に比較して胴部が不釣り合いなほど細く短い人物の破片があり、腰の前後に鞍から剥離した痕跡が認められたため騎馬であると判断された。この人物部分は馬体を成形した後、馬の背に作られているもので馬体胴部の中空と人物胴部の中空はつながっていない⁽³⁷⁾。

騎馬の前に立つ人物は下げ美豆良で鉢巻をし、首には丸玉飾りをつけ、腰には鞆と大刀をつけ



- K 1—男子半身像。全高86.5cm。上げ美豆良で浅いつば付帽子を被り(鉢巻?)、右手を上げて左手は脇につける。帯は後で結ぶ。
- K 2—男子半身像。全高63cm。両手は胸におく。上げ美豆良で耳環をし、帯は前で結ぶ。腰に鎌をつける。
- K 3—男子半身像。全高90cm。下げ美豆良で鉢巻をし、首に丸玉、腰に大刀と鞘をつける。両手は脇にそえる。帯は右側で結ぶ。
- K 4—男子半身像。全高67.5cm。上げ美豆良で首に丸玉、腰に刀子をつける。両手は腰におく。帯は後で結ぶ。
- M 1—高123cm、長125cm。十字文の鏡板、三繫、鞍、障泥、壺^{つぼ}鏡^{あふみ}を装着。胸繫に馬鐙を下^{ひなかい}げ、尻に馬鈴及び杏葉の剝離痕有り。居木の下縁を突出させて表現している。
- M 2—高116cm、長122cm。環状鏡板、三繫、鞍、障泥、壺^{つぼあふみ}鏡^{あふみ}をつける。胸繫、尻繫には円形装飾がある。
- M 3—馬装は不詳だが鞍と壺^{つぼあふみ}鏡^{あふみ}は装着。下げ美豆良で天冠を被り、首に丸玉、腰に鞘をつけた男子が乗る。
- M 4—不詳。

第5図 電電神社跡古墳後円部における埴輪配置模式図(註70bより)

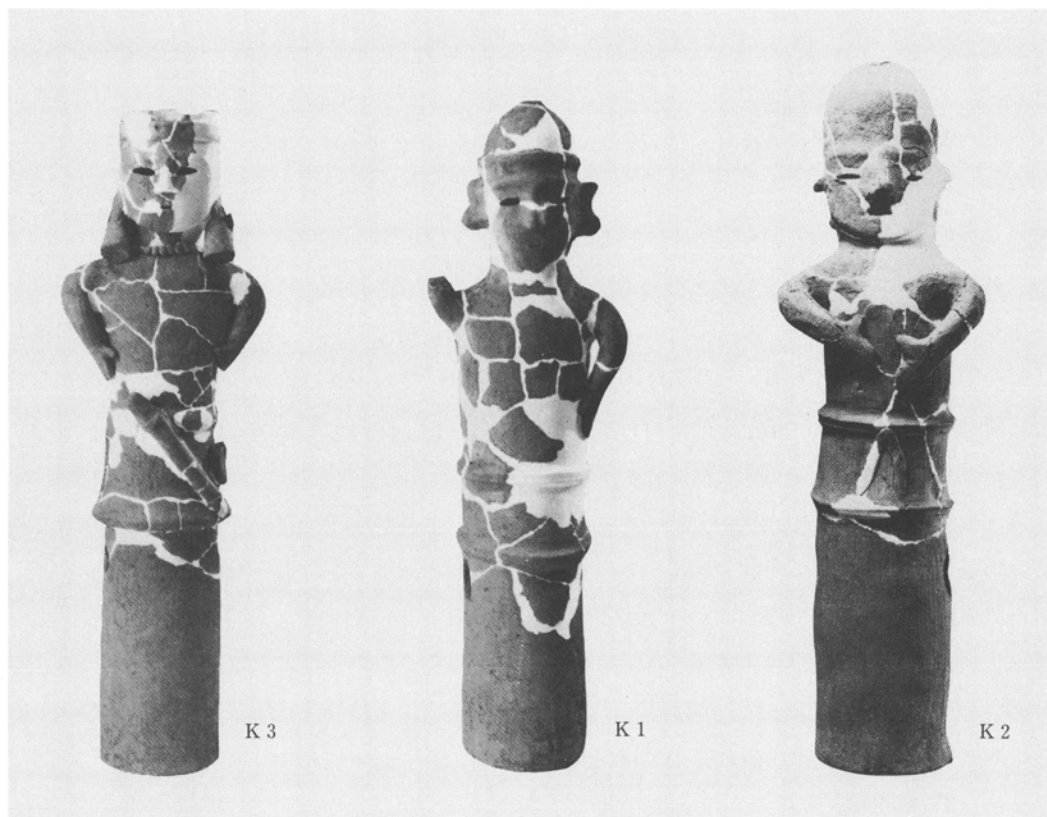


写真2 電電神社跡古墳出土形象埴輪(註9より)

ている。他のセット関係の馬の前の人物とは明らかに格差がある事が看取される。

なお、この4組の人物、馬形埴輪の前方及び後方に形象埴輪の配置があったものと思われるがすでに破壊が進んでいたために詳細は不明であった。

東毛養護学校内古墳⁽³⁸⁾ (第6図) 群馬県太田市高林

昭和44年に東毛養護学校内から工事中に出土した資料で、伴出埴輪は家、女子頭部、人物半身像の腰から基台、f字形と思われる鏡板をつけた馬頭部、馬脚があり、そして後に同一箇所から外面一次縦ハケの2条突帯の円筒埴輪が出土している。出土古墳は高林西原古墳群に属し、「上毛古墳総覧」記載漏れの古墳である。調査を経てはいないが10mほどの円墳といわれている。高林西原古墳群は他の古墳群とともに高林古墳群に包括される。古墳群中情報が得られる古墳としては、墳丘長56mの帆立貝形古墳の旧沢野村第72号(中原)古墳⁽³⁹⁾、72mの帆立貝形古墳の旧沢野村第54号(諏訪山)古墳⁽⁴⁰⁾、径40mの円墳である旧沢野村第63号古墳⁽⁴¹⁾、角閃石安山岩の五面削り石を用いた胴張りの横穴式石室を持ち埴輪配列のない旧沢野村102号古墳⁽⁴²⁾などがある。旧沢野村第72号(中原)古墳は円筒埴輪列が検出され、主体部の積石式粘土郭から大刀、鉄鏃、短甲、小札が出土している。築造年代は5世紀末といわれる。旧沢野村第54号(諏訪山)古墳は組み合わせ式石棺を有し、6世紀初頭の旧沢野村第63号古墳は主体部の礫榔から直刀、挂甲小札、鉄鏃、馬具類が出土し、円筒埴輪も検出されている。

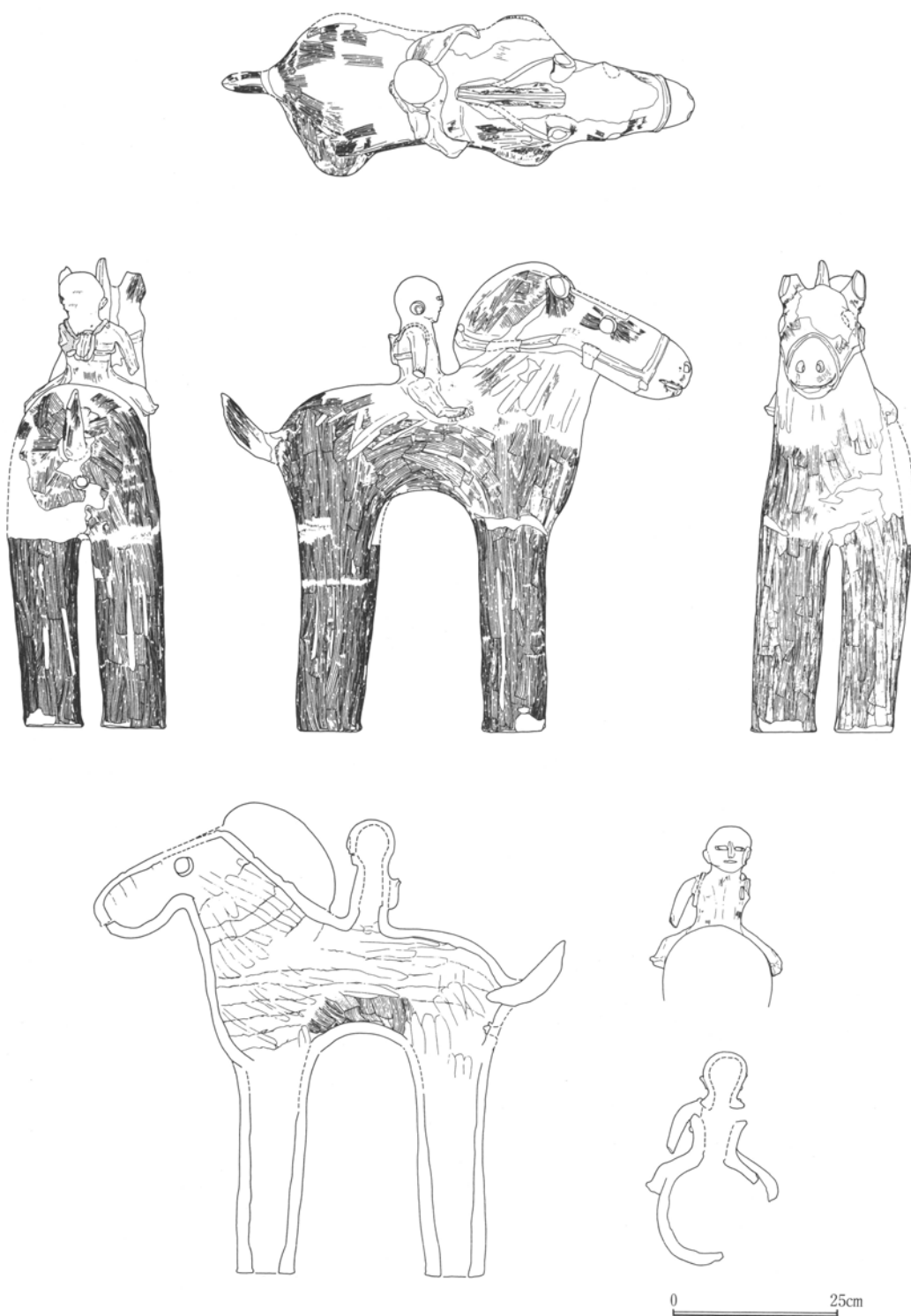
騎馬は長さ70.7cm、高さ70.4cmを測る。馬装は鼻革・顎革と両手綱のみで鞍その他の馬具はいっさい認められない。手綱の一部に赤彩が残る。脚部は粘土紐の単位の凹凸を残し縦方向の亀裂が入っている。腹部はアーチ状を呈し、胴部・頸部は粘土紐の巻き上げで、背は粘土紐を左右にアーチ状にかけ渡している。頭部の成形については顎は粘土板、両側部は粘土帯、顔面は左右に粘土紐をかけ渡す手法である。人物部分は服飾の表現がなく、頭部も美豆良や髪表現が見られない。背には肩紐によって何かを背負っているのが看取される。この背負い物は表面に剝離痕があり、本来の造作は不詳である。人物部分は巻き上げ成形で馬体胴部の中空と人物胴部の中空が通じており、この穴は切り込み法と成形時の空間残存法の可能性が考えられる。腕は粘土棒の差し込み式である。足は馬体に粘土を貼り付けている。背負い物、肩紐も粘土貼り付けである。

本資料は鞍も置かず、鼻革・顎革・両手綱というきわめて簡単な馬装でも乗用した証左である。人物部分は美豆良などの表現が省略されたのではなく、これが本来的な姿であると考えられ、何らかの職能を示している可能性がある。時期としては6世紀前半が考えられる。

伝群馬県出土⁽⁴³⁾ (写真3、写真4) 四天王寺宝物館所蔵

本資料は20年ほど前、他の埴輪とともに四天王寺に奉納された資料である。同時に納められた資料とは共伴関係はなく、「伝群馬県」というのみで出土古墳や共伴遺物などはいっさい不明である。四天王寺に納められる以前の来歴も定かではない。

騎馬は高さ118cm、馬体のみの高さ103cmで、長さ105cmである。人物部分は頭から足まで55cm、馬の背から頭頂部まで36cm、頭頂部から顎まで14cm、腰部は8×11cmである。馬装については、



第6図 東毛養護学校内古墳出土馬形象埴輪実測図(註1より)

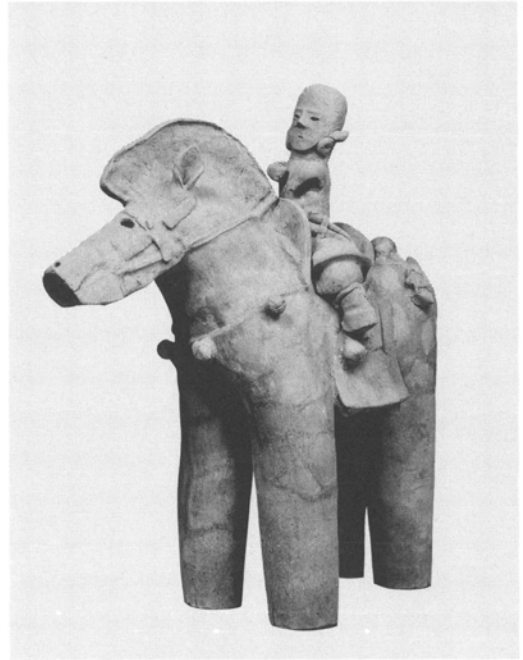
素環の鏡板の剝離痕が認められる。左側立髪近くに項革の一部が残り、右側では項革の剝離痕が認められる。頬革が復元され、額革・咽喉革の一部が残存しておりボタン状の円形装飾をつけている。左側に引手が残存している。手綱は両手綱で前輪と立髪の接合点を廻っている。胸繫はごく一部残るのみであるが、馬鈴で飾られていたことが看取される。鞍の前輪と後輪の左右には居木先の表現が見られる。前輪の左右の居木先は完存しており、後輪では右側がわずかに残り、左側は剝離痕のみである。鞍は補修の跡が著しい。鏡は壺鏡である。左側では鏡軛の剝離痕は判別できなかったが右側では壺鏡の上に何らかの剝離痕がみられる。障泥は前後端・下端が一段肥厚して復元されている。尻繫は後輪の居木先から伸びている。左右の尻繫とも後輪から離れるにつれて著しい補修のために剝離痕も判別できなくなっている。尻部分には鈴および雲珠と推定される半球形の粘土塊が付けられている。また、剣菱形かと思われる杏葉を下げており、縁とくびれ部を粘土紐で肥厚させ、そこに鋌留め表現と思われるボタン状粘土を8箇所に貼り付けている。杏葉の表面は竹管文が施されている。この杏葉は馬体から上端は1cm程、下端は3～4cm程の厚みをもっている。この杏葉表現の類例として前橋市後二子古墳出土資料⁽⁴⁴⁾、佐波郡境町出土馬形埴輪の杏葉⁽⁴⁵⁾が挙げられる。後二子古墳例は馬形埴輪から剝落した杏葉で、成形法や外見が本資料と酷似している。

成形面の観察では、鼻先は円筒状のままで粘土の重ね合わせの痕跡が端部で看取される。それは円筒埴輪の底面で見られる基部粘土の重ね合わせと同じで、巻き上げて成形されていると思われる。口は切り込んで作られ、鼻の穴はくり貫かれて表現されている。また、円筒状の頭部の左右に粘土板を貼り付けて頬骨表現がなされている。耳は頭部に差し込んでおり、耳内部には絞り込んだ皺状の痕跡がある。立髪端部の残存している前端部分では粘土が弱く「T」字形になっているが、円柱状の表現はみられない。顎は一部分しか残っていないが、三角形になるとと思われる切り込んだ穴がみられる。尻尾は中空に造られている。尻尾の下は補修部分で穴はないが、本来は穿孔されていたと思われる。腹部は補修がなされているが破片の様子からはアーチ状にはならないようである。脚部下端には三角形の切り込みが見られる。脚部は縦横に破損や亀裂補修が見られ、成形法は定かにできなかったが、粘土紐の痕跡と思われるわずかな凹凸は認められた。尻部分は補修部分も多いが、後脚のラインから大きく張り出すようである。

人物部分は喉から顎にかけて欠損し補修がみられ、腹部や背中にも補修部分がある。鼻の頂部は欠損している。頭頂部には1cm程の穴がみられるが、原形のままなのか欠損しているのか判別できなかった。頭部には他に何の剝離痕も認められない。左右側面には突起が見られるが、上げ美豆良の表現と思われる。左側の突起の下には耳環をつけている。右側の耳環は復元である。顔はやや左側を向いている。手は前方へ伸びており、右手には二本の粘土紐を握っている。腰には二本連なった刀子とも小刀とも受け取れる刀をつけている。これは朝鮮半島でみられる双子大刀に類似した表現であり注目される。類例として茨城県筑波郡谷田部町大字下横場字塚原出土資料⁽⁴⁶⁾、同県猿島郡境町大字百戸字マイゴオ出土資料⁽⁴⁷⁾が挙げられる。腿の位置には衣服の裾が表現され、



1. 右前から



2. 左前から (四天王寺宝物館提協)



3. 尻繫、雲珠、馬鈴、杏葉の様子



4. 鞍部分の剥離痕および焼けムラ



5. 鞍部分の様子 左側



6. 鞍部分の様子 右側

写真3 伝群馬県出土馬形埴輪 (四天王寺宝物館所蔵、1. 註(43)bより)

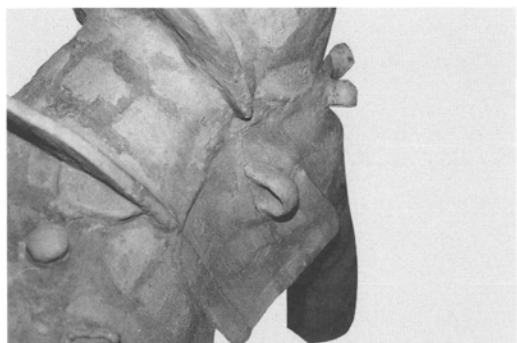
足結をした禪をはいている。残存状況の良い左足の足結の結び目には円形の剥離痕があり、鈴をつけていたものと思われる。左足は禪の裾の部分から折れており、足首から先の部分は壺鐙にかかる状態で現在馬体に貼り付いている。つま先は欠損しており、モルタルの様なもので復元接合されて壺鐙へ続いている。右足は禪と馬体が接合する部分およびつま先が欠損している。右の壺鐙の中には何も詰まっていなかった。人物の裾は左右側面では腿の位置に表現されているが前後は鞍橋に阻まれて表現されていない。

この人物部分の足はつま先から足結位置までは粘土棒である。足の甲は棒を折り曲げて表現し、右足では足首から足の裏にかけて粘土板で補強している。推定される手順としては、粘土棒に粘土紐を半円形に貼り付けていき、足結より上はアーチ状に膨らみをもたせ、その上に衣服の裾を粘土帯あるいは粘土板を乗せるような形で造っている。腿の位置にある衣服の裾は粘土板を二重に折り曲げて段差を作り、さらにその上に粘土を乗せて腿から腰のラインを出している。腿から腰にかけて内面は石膏復元及び補強部分が多く粘土の扱い方は判別できない。胴部・腰部は通常の人物埴輪と同じく巻き上げと思われる。この胴部・腰部の空洞部分と馬体は貫通していない。腰部も石膏復元と内面からの補強が多く、衣服の裾の内部で尻部分が形造られていたのか明確ではないが、後述する鞍の状態から尻は作られなかったと判断できる。この人物部分はおそらく馬体が完成あるいは完成に近い段階である程度乾燥させてから形造ったものと推定される。

馬体と人物がきれいに分離しているため、本来両者が一体であったものか検証してみたい。壺鐙には本来は人物の足が接合されていない可能性も考えられ、壺鐙部分より上の足表現の粘土棒が接合するはずの馬体部分も補修のため痕跡は判断できない。しかし、鞍には剥離痕と焼けムラが認められた。剥離痕は前輪近くに一条、後輪近くに一条みられ、剥離痕部分では破損している箇所もあって、石膏やモルタル様のもので補修されている。剥離痕の周辺部分は色調が黒味を帯び、後世の作為ではなく焼成時に何らかの粘土があったものと考えられる。鐙鞆や障泥を接続する紐にしては剥離が大きすぎ、左右に渡る必要もない。禪の残りが良い左足では、剥離痕と禪の前後の位置が一致する。また、人物裾の前後の部分は補修部分が多いが、前裾の部分に埋め込まれている破片には剥離痕がある。さらに前輪については人物裾にみあう位置が全域に渡って補修の痕がみられる。後輪については顕著な痕跡はみられないものの、人物を据えるにあたって接合した事を示している可能性が高い。馬体と人物は本来一体であったと考えられるのである。

⁽⁸⁾ 舟塚古墳 茨城県新治郡玉里村上玉里

霞ヶ浦北浦北端の玉里古墳群中の墳丘長72mの前方後円墳である。本墳は馬の背状の狭い台地上の自然地形を利用して構築されている。墳丘は段築を持たず、周堀も西側のみのようである。主体部は二重式の箱式石棺ですでに盗掘を受けていたが、ガラス製丸玉、ガラス製小玉、唐草文付銀製圭頭大刀把頭、銀製鍍金山梔玉、鹿角製大刀把頭、金銅製鞍金具一式、挂甲小札、鉄鏃、具、不明鉄製品、面繫あるいは尻繫に付属すると思われる座金具の出土をみた。ともに出土した人骨の分析から、被葬者は20歳以前の小柄な人物であるという。本墳は年代的には三昧塚古墳に



1. 鞍から障泥の様子 右側



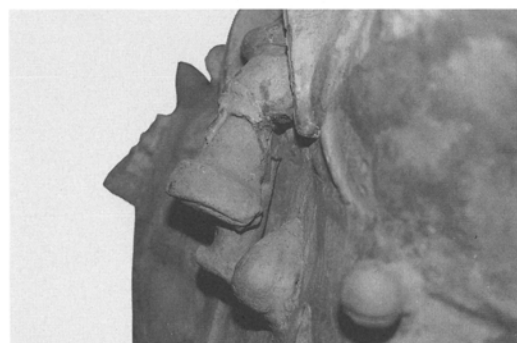
2. 人物部分 前面



3. 左側面



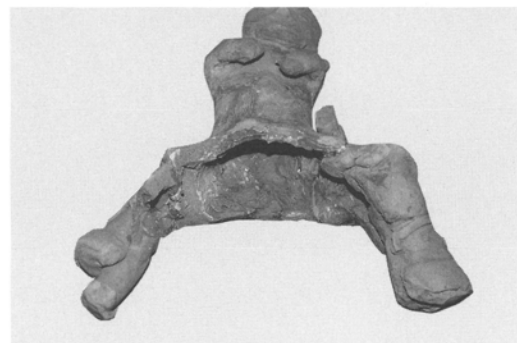
4. 人物部分 後面



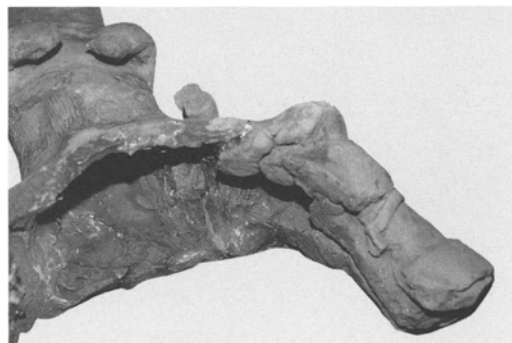
5. 人物部分 右足



6. 人物部分 左足



7. 人物部分 内面



8. 人物部分 左足の接合痕

写真4 伝群馬県出土馬形埴輪（四天王寺宝物館所蔵）

続く首長墓であり、霞ヶ浦北端部をおさえる地理的位置に占地した古墳である。

円筒列は2列確認されている。円筒埴輪は高さ70～80cmを測り、6条突帯を有する。3群に分けられ、これらの製作技法の差は工人集団の差と考えられている。形象埴輪は前方部西側くびれ部近くに位置する造り出しを中心に配置されていた。種類は人物、家、馬形埴輪がある。家は昭和19～20年頃造り出しに掘られた防空壕の埋め戻し中に出土している。地権者によればこの時舟の埴輪も出土したというが散逸している。

人物では、盾持ち・挂甲着装の男子・襷をかける女子、鞆を負う男子、笄帽の男子などがある。挂甲着装の男子は衝角付冑をつけているが、冑を持った例のみ蒙古鉢形冑と襟甲をつけており注目される⁽⁴⁸⁾。これらの全身像の人物は足部と上半身は別作りの技法によって造られている。

馬形埴輪は2個体以上確認されている。地権者によると騎馬の出土も防空壕工事によるもので、武人が乗っていたというが散逸してしまっているため詳細は確認できない。その位置は西側くびれ部近くの後円部という図示がある。調査の結果後円部には形象埴輪の配置は認められず、騎馬の存在も「8、埴輪列調査の経過」で一度は否定されている。しかし「12、舟塚古墳出土の埴輪」ではその出土に肯定的であり、信頼に足る情報としている。家の出土した周辺からの出土と読み取れる部分もあり、そうなると後円部に形象埴輪の配列がみられないことによる存在否定は成り立たないことになる。

共同執筆者相互の認識の違いからくるのであろうが、地権者の談話の一端をなす家の埴輪出土は確かであり、騎馬の存在も珍品であるため記憶に鮮明なのかもしれない。

⁽⁵⁰⁾
伝茨城県出土（写真5-1～4） 天理大学附属天理参考館所蔵

出土古墳等是不明だが、資料が納められている木箱には「東茨城郡上郷村出土」とある。騎馬はほぼ完形に近く復元されている。高さ91.5cm、長さ約87cmである。復元・補修は石膏着色の部分とモルタル様の素材を充填している箇所がある。復元部分は4本の脚部および右側を中心とする胴部下部、右側尻から尾の部分、右側頬の一部と頸部の一部である。

馬装は鼻革・顎革・頬革・項革・咽喉革がつけられ、両手綱がある。頭部は円筒状で左右側面に粘土板を貼り付けて頬骨表現をしている。鼻先はほとんど円筒状のままであるが、わずかに上から粘土をつけて鼻面を造っている。鼻の穴は穿孔後穴の端部を顔の中央よりの方に粘土貼り付けをして膨らませている。目も下辺が直線で上辺がカーブを描く半円形に近い形に穿孔後、上端を膨らませている。口は切り込みによって表現されている。耳は外向きにつけられている。耳の穴は開かず、馬体内部と貫通していない。立髪は前端を円柱状に表現している。円柱の横断面は長楕円形を呈し、端部に斜格子状にヘラ描きを施している。この円柱根元から板状の立髪の盛り上がりが始まっている。板状立髪の始まり部分が欠損しているものの、円柱表現と板状表現は本来的に分離していたようで、円柱の根元を項革が通り、その後を板状の立髪が続く。馬体の胸には4cmほどの穴が、尻には約2cm、腹部で9cmほどの穴が開けられている。下顎部分は穿孔されていない。両手綱は立髪を廻る部分で割れ口を見せており、手綱を束ねる表現がなされていたと



1. 左前から



2. 人物部分 左前から



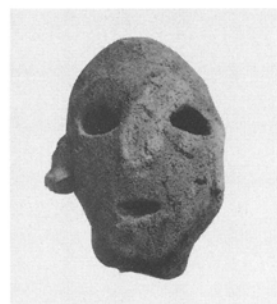
3. 人物部分 背中の剥離痕



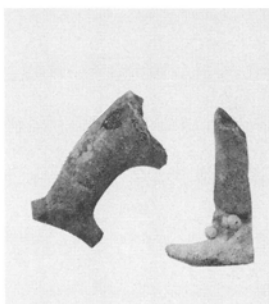
4. 人物部分 右側面



5. 馬形埴輪



6. 人物部分 (?)



7. 美豆良と足

1. 註(2)より
5～7. 註(6)より
伝茨城県出土馬形埴輪 (1～4)
天理大学附属天理参考館所蔵

写真5 伝茨城県出土馬形埴輪 (1～4)、足利市中里町出土形象埴輪 (5～7)

も思われる。腹部は平坦で、断面はかまぼこ形を呈している。胴側部は緩いカーブを描いて下方に突出している形に復元されている。障泥の下端の様でもあるが胴部には障泥を表現するようなヘラ描きも粘土の剝離痕も認められない。

人物部分は頭頂部から馬体背中まで29.5cm、馬体背中から人物つま先まで18cm、腰部径7.2cm、肩から腰まで11.5cmを測る。頭部中央には前後方向の指ナデが見られ、頭髮の桃割れか剃り込みの表現と推定される。眉の部分は左右にわたりうず高く表現している。目は下辺が直線的で上辺がカーブを描き、半円形のような形をしている。頭側部左右には径2cm程の穿孔がある。背中には縦8.5cm、横6.5cmほどの剝離痕があり、その上下左右の隅から胸で交差する襷がけの紐がでている。この剝離痕は長楕円形に近いが一部左上に粘土がわずかに残っており、おそらく本体は不正隅丸長方形になるのではないかと思われる。両腕を欠損しているが割れ口やわずかな粘土の痕跡から左手は前方向で右手は下方向へ伸びると思われる。足は馬体に粘土板を貼り付ける方法である。尻から腿にかけては7～8cm幅の粘土で膝から臍にかけては棒状となる。足の甲の形もきちんと出しており、ヘラ描きによって指が表現されている。この人物は巻き上げ成形で、胴部の中空は馬体に貫通している。服飾の表現はいっさい見られない。胴部には背中以外剝離痕は認められない。顔は丸みを帯びており顎表現が弱い。頭部左右の径2cm程の剝離痕は耳の痕跡か美豆良か判断に苦しむが、美豆良にしては接合点が小さすぎる感がある。美豆良だとしても肩まで届く下げ美豆良ではない。人物部分はナデ調整で、馬体は基本的にハケメ調整である。

なお、本資料は馬体と人物は本来別個体のものを接合したらしい跡が紫外線照射によって指摘されている。馬体としては、目の切り方では東茨城郡茨城町神谷10号墳出土の馬形埴輪⁽⁵¹⁾に例がみられるし、立髪の内柱部分と板状部分が連結しない表現は馬渡遺跡A地区3号窯の例や鉾の宮2号墳例⁽⁵⁴⁾、元太田埴輪窯例⁽⁵⁵⁾が挙げられる。鼻の穴の一端を盛り上げる例は三味塚例⁽⁵⁶⁾に認められる。人物の目の切り方は著名な大平黄金塚古墳出土の赤子を抱く女子⁽⁵⁷⁾にみられる。頭の桃割れの表現も馬渡遺跡例や茨城町大字駒渡字駒形出土例⁽⁵⁸⁾に見られる。胴両側部下端の障泥のような突出には理解に苦しむが、おおむね馬体・人物とも茨城に見られる形状である。別個体を接合した痕跡というのは人物を別作りで成形し、接合されるという成形過程の工程差とも考えられる。さらに人物の胴から上は信頼に足るとされているが、人物部分のみでは大きさからみても通常の人物埴輪とは考えがたい。さらに背中の剝離痕は腰部に及び、腰部の粘土はそのまま足や馬体へと続いている。さらに人物の前後には鞍橋との剝離痕がみられないことから鞍はつけていなかったと判断でき、裸馬の可能性がきわめて高い。たとえ現在の馬体が贋作や別個体であっても、人物部分に伴う馬体は鞍も飾りもない装備であったと考えられるのである。このことは第4章で述べる事項からも追認できる。

足利市中里町出土資料⁽⁵⁹⁾ (写真5-5～7) 栃木県足利市中里町字神明給 (東京国立博物館所蔵)

同一地域の出土として五領式から鬼高式までの土器類と常滑の大甕とともに形象埴輪が写真で呈示されている。そのなかで残存長13.9cmを測る人物の足が騎馬の人物部分の資料とされている。

残存高9.6cmの上げ美豆良をつけた男子頭部も騎馬の人物部分の可能性が考えられている。鼻革・頬革・額革・項革と手綱のみの馬形埴輪頭部もあるが人物部分と同一個体になるのか不明である。出土古墳や伴出遺物などの詳細は不明である。

矢田野エジリ古墳 (第7図、第8図) 石川県小松市矢田野町

本墳は全長約27.4mの前方後円墳で墳丘はすでに削平され、主体部も検出されなかった。周堀から須恵器と埴輪が出土した。須恵器は古相を残すTK10並行に属する。円筒埴輪は周堀各所から出土するのに対し形象埴輪は古墳北側の前方部からくびれ部にかけて集中して出土している。

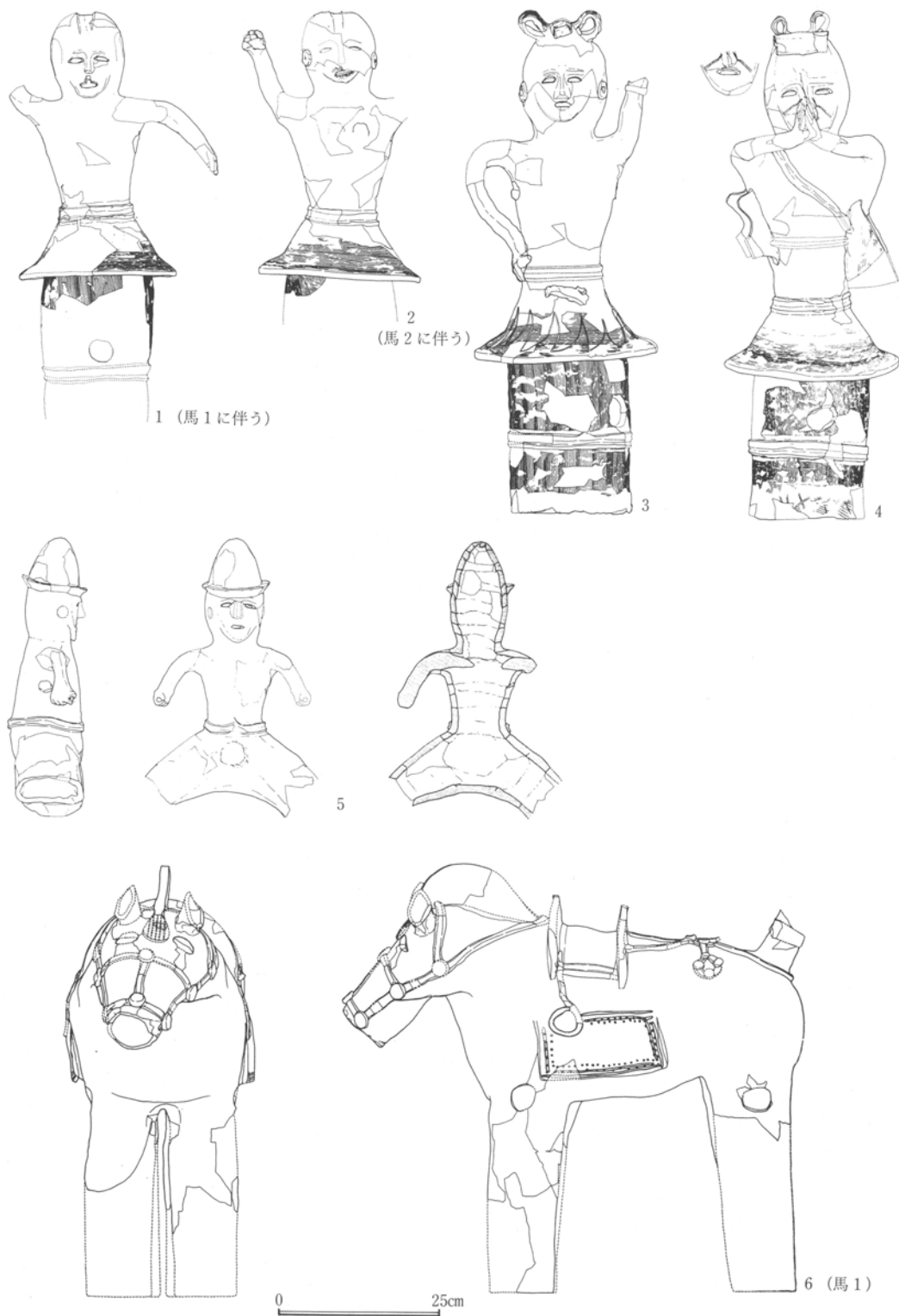
埴輪は形象埴輪がすべて須恵質で、円筒埴輪も一部を除いて須恵質である。円筒埴輪は断面M字形の3条突帯で外面は一次調整の縦ハケを施し、淡輪技法⁽⁶¹⁾と倒立技法⁽⁶²⁾がみられる。内面に当て具痕が認められる。透孔は基本的に円形である。

形象埴輪は馬形埴輪2個体と半身像の人物9個体である。人物の内容は右手を挙げる男子2個体、意須比着用の手をあわせる女子2個体、特殊な髷を結った人物2個体で、帽子着用のひざまづく(跪座)男子・冠着用の男子、首に丸玉飾りをした飾り帽の男子が各々一個体である。

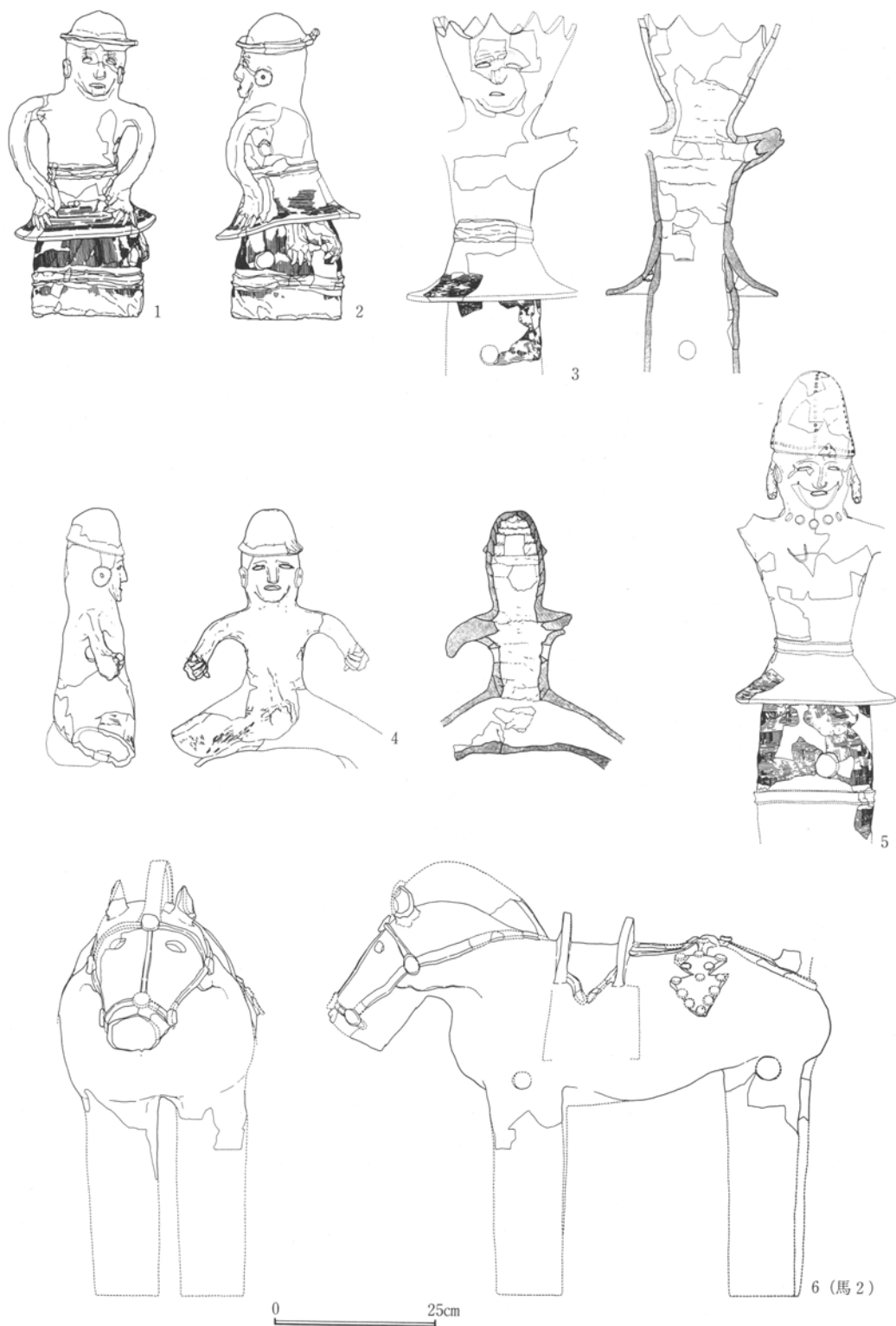
馬形埴輪は2個体とも騎馬である。これを馬1、馬2と呼ぶことにする。馬1(第7図6)は面繫は鼻革・頬革・項革があり、さらに目と鼻革の間にもう1本革紐を左右に渡し、この革紐と鼻革との間に鼻梁革をつけている。それぞれの紐が交わる部分に2cm程の円形粘土を貼りつけている。鏡板、引手は認められないが両手綱をつけている。鞍をおき、鞍の下端を粘土貼り付けによって段差を明確にしている。輪鐙をつけ、障泥は鞍と間隔をおいて長方形に粘土貼り付けおよび沈線と竹管文によって縁どりが施される。胸繫は認められない。尻繫は後輪の3箇所と接続させ、円形の雲珠を経て尻尾へ伸びている。雲珠の4箇所にボタン状粘土の貼り付けがみられる。杏葉も円形を呈し同じく4箇所にボタン状粘土の貼り付けがあり、鋳留め表現と思われる。

頭部は円筒状を呈し端部も円筒状のままで鼻の穴や口の切り込みはみられない。顎から頸部へ粘土板をかけ渡している。立髪は前端を円柱状に整えず額に寝かせたままの表現がみられる。その後へ続く立髪は前端が一部断面「T」字形を呈しているが、あとは単なる板状となる。腹部は前後脚を板で接合させる方法によると思われ、中央部分が自重により下がってきている。耳は馬体の穴に差し込んで接合させる。尻尾は先端を欠損するが中空の作りで、外面に一部紐状の粘土が残っている。尻尾に紐を巻き付けたものと思われる。穴は前後脚つけ根外側左右に穿たれている。あとは尾の下に穿孔されるのみである。脚部には蹄表現の切り込みはない。脚部は縦ハケ後横ハケで胴部はナデである。

人物部分(第7図5)は完全に馬体とは別作りである。乾燥・焼成も別に行っている。馬1に乗る人物はつば付き帽子を被る。左手、両足先端を欠損する。頭から股まで38.1cm、腰部径8.1×10.9cmである。手は下へ下げ、残存する右手には先端の欠損する棒状粘土を握っている。両脇の下に穴が開けられている。下腹部に円形の剝離痕があるが、これは乾燥時あるいは焼成時に自立できるように全く本体と違う粘土棒で支えをしていた痕跡と推定されている。背や胸、腹などにはいつ



第7図 矢田野エジリ古墳出土形象埴輪実測図 (註22)より



第8図 矢田野エジリ古墳出土形象埴輪実測図（註2より）

さい剥離痕は認められない。衣服の表現も帯と思われる腰の粘土紐以外見られない。髪表現もみあたらない。

馬2(第8図6)の馬装は面繫は鼻革・頬革・額革・鼻梁革が認められ、顎革がわずかに表現されているようである。各々の革紐の交点には円形粘土が貼りつけられている。鏡板は見られない。両手綱は立髪と鞍の間を廻っている。胸繫はみられない。鞍橋から「U」字状に粘土紐貼り付けが見られるが鐙鞆であろうか。障泥部分は粘土が剥落しており、鐙の型式も不明である。尻繫は後輪左右と中央の三方からでて不正円形の雲珠に至り、尻尾を廻っている。雲珠には2箇所ボタン状粘土が残っており、剣菱形と思われる杏葉が左右に下げられ、杏葉の縁にはボタン状の粘土貼り付けがみられる。

鼻先は円筒状で鼻の穴、口の切り込みはない。耳は外向きにつけられ、馬体の穴に差し込んでいる。立髪は鞍に近い部分が1/3ほど残存しており、断面「T」字形を呈している。顎から頸部に粘土板をかけ渡している。下顎に穴は開かず、胸にも穴はなく前後脚部の上部左右に穴が見られる。脚部は下半が欠損しているが倒立技法の巻き上げによって作られている。腹部は前後脚に粘土板をかけ渡す方法で作られ、自重でやや下方に下がってきている。右側障泥部分剥離箇所⁽⁵³⁾にタタキが認められる。尻尾は欠損してはいるが中空に作られている。尻尾の下には穴が開く。また、鞍の鞍橋が通常の馬形埴輪より低く作られているのは人物が乗るためと思われる。調整は脚部は縦ハケ後横ハケ、胴部はナデである。

人物部分(第8図4)は左手・両足を欠損している。帽子を被り右手には先端の割れた棒状のものを握っている。拳に手甲状の粘土突出がある。両脇の下には穴が開いている。右足の割れ口の観察から、右足は乾燥時か焼成時に割れている。下腹部には全く異なる質の粘土が残存する剥離痕があり、尻部には刺突痕が近接して2箇所見られる。これらは自立しない人物部分を異なる粘土を支えにし後は棒状のもので支えて乾燥・焼成したものと思われる。背や胴部には何の剥離痕もない。

なお、どの資料とも接合しないが端部がややすばまって収束する円筒状の資料がある。エジリ古墳の資料は接合率が高く出土資料中で未知の器種が存在する可能性は低い。円筒状の附属物を伴う可能性のある人物埴輪はみあたらず、騎馬の人物部分の足の続きの可能性が高い⁽⁵³⁾。人物の足はつま先まで表現されず、円筒状のまま製作が終了されていることになる。

これら騎馬の前に立つと推定される人物埴輪は右手を挙げる男子2個体である。第7図1は頭頂部前後に桃割れか剃り込みの表現と思われる指ナデがある。頭側部には円形の剥離痕があり、耳あるいは美豆良と思われる。先端が欠損しているが右手を挙げ、左手は下に向く。両脇の下に穴があく。帯表現がある以外いっさいの衣服、装飾品の表現はない。口は兎口を表している。馬1に伴うとみられる。第7図2も頭頂部に前後方向の指ナデがみられる。頭側部には耳がつき、口の周囲はへう描きで充填されている。挙げている右手は何かを握るように拳を作っている。両脇の下には穴があく。胸には逆U字形のへう描きが2箇所見られる。美豆良や服飾表現はみられ



1. 意須比着用の女子 前面



2. 同 左側面



3. 同 後面



4. 同 右側面



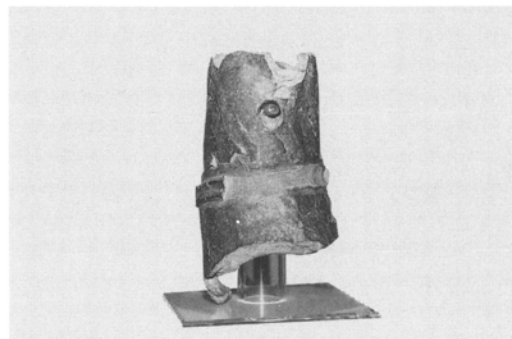
5. 騎乗の男子 前面



6. 同 左側面



7. 同 後面



8. 同 右側面

写真6 大海川河口遺跡出土形象埴輪

ない。馬2に伴うようである。2個体とも裾部は横ハケ、胴部はナデで仕上げられている。

⁽⁶⁴⁾
大海川河口遺跡（北川尻遺跡）（写真6） 石川県羽咋郡押水町

加賀・能登国境を流れる大海川河口付近の同一場所から明治時代に人物埴輪3個体、円筒埴輪若干が採集されている。かつて古墳があったという伝承もなく、遺跡の性格をはじめ不明な点が多い。

円筒埴輪は外面縦ハケで内面に同心円文の当て具痕が見られる。人物埴輪は現在2個体残っており、いずれも須恵質である。1個体は残存高37cmで頭部・両腕・基台部を欠損する半身像である。襷を掛け、右側が剝落しているが意須比をつけていたとみられる。両脇の下に穴が開く。両腕は前方へ伸びるようである。腰には幅広の突帯で帯を表現している。裾には横ハケが施される。全体的に矢田野エジリ古墳の手を合わせる女子に酷似している。

もう1個体は残存高19.5cmで肩付近から腰および尻までの資料である。胴径9cmで腰に帯表現の突帯が巡るのみで他は何の表現も見られない。下腹部に不整形の剝離痕がある。両腕は欠損しているが左腕は下方向へ伸びるようである。両脇には穴が開く。突帯から下は衣服の裾と違って広がらず、むしろ背中から尻の方へ内弯し収束していく傾向が認められる。円筒状の基台部の痕跡も見られない。内外面はナデで仕上げられている。

後者の資料はその形状、大きさから通常の人物埴輪とは思われない。矢田野エジリ古墳と同様の騎馬の人物部分である可能性がきわめて高い。下腹部の剝離痕も帯の下げ緒と見るよりもエジリ古墳と同様の現象と判断できる。突帯から下の左右欠損部分も開脚する足のつけ根から割れているものであろう。本遺跡の資料がエジリ古墳と同じく二ツ梨殿様池窯からの供給であることもこの推測の裏付けとなる。

⁽⁶⁵⁾
経塚1号墳（第9図） 福島県河沼郡会津坂下町大字塔寺字経塚

本墳は直径24mほどの円墳で、墳丘はすでに削平されていたが周堀から多くの埴輪が出土した。円筒埴輪は2条突帯を有し外面調整は縦ハケである。透孔は円形と半円形を呈する資料がある。形象埴輪は人物6個体以上、鳥2～3個体、馬2個体、家2個体、高杯形器台1個体、人物台部1個体である。人物は冠を被る男子2個体、帽子を被る男子1個体、女子3個体がある。帽子を被る男子は馬形埴輪の近くで出土しており、馬引きの可能性も考えられる。

馬形埴輪は欠損部分が多いが、2個体のうち1個体が騎馬と判断される（第9図17）。その馬装は三繫とf字形とも思われる鏡板、両手綱、鞍、障泥、輪鐙が見られる。胸繫には鈴、尻繫には三鈴杏葉がつけられている。立髪前端には円柱状の表現がある。障泥には人物の足が接合できたが、足は輪鐙にはかかっていない。接合できた足は粘土棒から成形したつま先から膝下ぐらいまでの部分である。鞍も復元が多く人物との接合部分も欠損している。人物部分は明確ではないが第9図5が候補としてあがっている。しかし極端な前傾姿勢の人物は知られていず、直立させると腕が上がりすぎてしまうので、この資料は何かを捧げ持つ所作とした方が妥当性であろう。人物部分を推定するとすれば、伴出の人物埴輪より小型のはずであり、呈示された資料のなかでは



第9図 経塚1号墳出土土形象埴輪 (註24より)

6や7・8が可能性があるが、同様の頭部が2個体あるなど特定は困難である。もう1個体の馬形埴輪は騎馬ではないが同様の馬装である。

本墳は会津地方で6世紀前半の古墳として初めて多くの埴輪の出土を見た古墳である。

その他 上記の他に騎馬の存在を伝えるものとして次の4例がある。

①茨城県中湊市藤の上古墳⁽⁶⁷⁾

②茨城県勝田市大平古墳⁽⁶⁸⁾

③群馬県藤岡市土師社窯跡⁽⁶⁹⁾

④栃木県真岡市鶏塚古墳⁽⁷⁰⁾

①の「中湊」は「那珂湊」であり、「藤の上」は現在みられる「富士の上」であると思われるが、現段階では古墳の分布は認められない。その資料の存在も今回確認できなかった。②は大平古墳群中の一古墳であろう。赤ん坊を抱く女子の埴輪は大平古墳出土として名高いが、正確には大平黄金塚古墳出土である。馬形埴輪も出土しているが騎馬の存在は知られていない。大平1号墳も大平古墳と呼ばれることがあるが、こちらにも騎馬は確認されていない。今回騎馬資料の存在は管見に触れなかった。③は本郷埴輪窯跡を指すと思われる。本郷埴輪窯跡についてはすでに過去の調査を再評価した労作があるが、騎馬についての記述は見えない。今回騎馬の資料を確認できなかった。④は鶏塚古墳出土資料の中の足結をした小型の人物の足部資料を騎馬の人物部分のものとする見方である。しかし古墳調査の報文中に同資料が受け台と思われる板状のものに接合されている写真が掲載されている。やはり報文で述べている通り琴を弾く男子の足あるいは数多く出土している女子のいずれかが椅座となり、その足と考えた方が妥当であろう。

4 騎馬の諸特徴

(1) 騎馬の分類

成形技法からの分類 騎馬はすでに復元されて内面観察が困難であり、なおかつ資料の残存状態の制約上馬体と人物の接合部分の成形法にポイントを当てて分類を試みると次のようになる。

A. 馬体と人物の中空部分が通じている。

B. 馬体と人物の中空部分が遮蔽される。

①人物の尻を作らない。

②人物の尻を形作っている。

C. 馬体と人物が全く別作り。

Aでは馬体成形と連動して人物を形作っている。これと全く対照的な方法がCであり、成形から焼成まで完全に別作りである。ただし、途中で両者のサイズや据わりを調整した可能性まで否定するものではない。Aの接合法は比較的小型の馬形埴輪と人物部分のなかでも小型の人物に用いられているようである。B①は馬体を造形した後、人物部分を形作るもので伝群馬県例は足の造形が立体的で足結が表現されている。生出塚6号墳例では足は平坦だが括り緒が表現されてい

[illegible]

(墳形：前後＝前方後円墳、円＝円墳、規模単位＝m)

る。B②の人物部分は胴部の幅、長さなど大型であり、騎馬の中では最大となる。これだけの粘土重量に馬体が耐えられるか疑問であり、すでに指摘されているように馬体全てを形作ったのではなく人物部分と鞍のみの造形である可能性が考えられる。この点で他例とは異質である。Cは矢田野エジリ古墳例と大海川河口遺跡例で二ツ梨殿様池窯で生産されたものである。両者の造形は巫女を含め酷似しており、同じ工人ないし工人集団によって製作されたものと判断される。

馬装からの分類 第3章で述べた事項をもとにした一覧表を参考にすれば馬装は次のように分類できる。

I. 鏡板をつけ、三繫・両手綱・鞍・障泥・鐙を装備し、胸繫、尻繫には鈴、杏葉等で飾る。

伝群馬県出土資料、経塚1号墳

II. 鏡板がなく面繫と両手綱・鞍・障泥・鐙を装備するが胸繫はない。尻繫には杏葉がみられる。

エジリ古墳馬1・馬2

III. 鞍をつけず面繫・手綱のみ

東毛養護学校内出土資料、伝茨城県資料

騎馬は胸繫に馬鐸を下げる例はみられないが、馬鈴で飾り、尻繫にも杏葉のある完全装備ともいえる馬装がある。これが馬装Iである。これより1～2装備が欠ける形で馬装IIがある。エジリ古墳例では胸繫を装備せず鏡板もみられないが尻繫には杏葉が認められる。さらに鞍や鏡板を欠き面繫と手綱のみの馬装IIIがある。

人物部分からの分類 さらに人物部分の形態・服飾などの分類では次のようになる。

ア. 下げ美豆良で、天冠、首飾り、鞆等の盛装。

雷電神社跡古墳例

イ. 上げ美豆良に大刀のみなど服飾表現はされるものの乏しい。

伝群馬県出土資料、矢田野エジリ古墳例、生出塚6号墳

ウ. 頭髮、衣服、装飾の表現がほとんどなく、何かを背負っている。

東毛養護出土資料、伝埼玉県出土資料、伝茨城県出土資料

雷電神社跡古墳例の人物部分は判明する限りでは下げ美豆良で冠を着用し、首を丸玉で飾り、鞆をつけている。通常の人物埴輪では腰に鞆の見られる場合は大刀を伴い盛装しており、本例も同様のことが推定されることから、アに入ると判断できる。鬼の枕古墳例は裾部に装飾があることからアまたはイに入ると推定される。奥の山古墳例は括り緒の褌の表現があり、イまたはアの範疇に入ると思われる。エジリ古墳例はイに入る。大海川河口遺跡例もエジリ古墳例と同様にイに入る可能性がある。円墳である立山山13号墳例は復元が多いが大刀を伴うようで、イあるいはアとなろう。生出塚6号墳例もイである。経塚1号墳の人物部分是不詳だが足には朱線が入っており、褌の裾の表現とも思われるが判断できない。

馬装と人物との関係 アにあげられた雷電神社跡古墳例は馬装IあるいはIIになると思われる。イでは伝群馬県出土例は馬装I、エジリ古墳例は馬装II、生出塚6号墳は鞍や尻繫などが無いと

ころから、馬装Ⅲの可能性が強い。成形法では、伝群馬県例と生出塚6号墳例はB①、エジリ古墳例はCとなる。ウは東毛養護例、伝茨城県例ともに馬装Ⅲである。伝埼玉県例も鞍がないことから馬装Ⅲに入ると思われる。成形法はAに属して三例とも共通している。他には奥の山古墳例は鎧・障泥があるらしく鞍の存在も予想されることから馬装ⅠかⅡに属す可能性が考えられる。アの人物は少なくともある程度の馬装を整えた馬形埴輪に伴い、ウは馬装Ⅲを有する馬形埴輪に付属することが理解される。

この結果から、馬装ⅠあるいはⅡにアないしイの人物が造形され、ウの人物は伴わないといえる。馬装Ⅱにはイないしアの人物が伴い、やはりウの人物は作られない。馬装Ⅲではウの人物が伴い、一部にイの人物がみられる。アの人物は造形されない。馬装Ⅰ・Ⅱとア・イは資料的な制約もあって不可分の関係となっているが、馬装Ⅲとウがほぼ一致している。

小結 以上を簡略にまとめると次のようになる。

1. 馬装Ⅰ・人物アおよびイ
2. 馬装Ⅱ・人物イ（アを含む可能性あり）
3. 馬装Ⅲ・人物イ
4. 馬装Ⅲ・人物ウ

成形技法は1類がB①、2類はC、3類はB①、4類はAである。1類には伝群馬県例があり、経塚1号墳例が可能性としてあげられる。2類の人物部分は現在資料的制約からイ及びアが考えられる。エジリ古墳例が2類である。雷電神社跡古墳例は1類に入るかとも思われるが2類の可能性も否定できない。鬼の枕古墳や奥の山古墳例も1類か2類に属するだろう。3類は生出塚6号墳例があげられる。4類は東毛養護例、伝茨城県例、伝埼玉県例を挙げることができる。

(2) 埴形との関係

騎馬出土古墳は前方後円墳と円墳がある。鬼の枕古墳のような地域首長墓、さらに埼玉の首長に対する補佐的立場の被葬者が推定される奥の山古墳が挙げられる。出土伝承を信頼すれば舟塚古墳も地域首長墓の例として挙げられる。エジリ古墳は小地域首長墓と思われる。円墳では立山山13号墳は24号墳や8号墳のような朝鮮半島との関係を想起させる古墳群中に位置する古墳であり、東毛養護学校内古墳のような直径10mといわれるような小円墳にまで及んでいる。

類型からみると1類は円墳の経塚1号墳が可能性としてあげられ、前方後円墳に伴う可能性もある。2類は前方後円墳である。3類では生出塚6号墳は円墳であり4類の東毛養護例も円墳といわれている。

(3) 分布傾向

馬形埴輪は九州から東北まで分布している。5世紀後半から6世紀代の形象埴輪を受容している地域には普遍的にみられるといつてよい程である。その中で騎馬は福岡県に2例、石川県に3例（うち2例は同一古墳出土）、福島県に1例の他は関東に集中している。埼玉県に4例、群馬県に3例、栃木県に1例、茨城県に2例であり、「その他」で取りあげた例を含めると茨城県に2例

追加され、群馬県に1例増加する。今回詳細が確認できた14例中でも8例が関東に集中している。単に馬形埴輪自体の出土数の多さが理由にならないことは、やはり出土数の多い畿内に確認されていないことによって理解される。

(4) 時 期

騎馬の出現は現在までのところ円筒埴輪に半円形透孔を有する経塚1号埴例と馬体の成形技法から時期推定できる東毛養護例が挙げられ、およそ6世紀前半代が考えられる。そしてエジリ古埴例・鬼の枕古埴例・奥の山古埴例・立山山13号埴例が続く。文献資料を信頼すれば冑山古埴例も挙げられよう。さらに6世紀後半～末の雷電神社跡古埴例まで至る。ほぼ埴輪消滅まで続くといつてよい。

類型別でみれば1類と4類が出現しており、1類から4類へあるいはその逆へといった進化論的な出現の方向は見られない。

(5) 配置と組成

前方後円墳 騎馬の配置が明確な例は雷電神社跡古墳が挙げられる。南に開口する横穴式石室の向かって右側の基壇テラス面に石室方向を向いて4組の男子半身像と馬形埴輪が配置されていた。4組の埴輪の前後に配置が続いていたと思われるが不詳である。人物と馬形埴輪4個体の間で少しずつ馬装や服飾の違いがみられる。鬼の枕古墳も石室開口部に向かって右側のテラス面に配置されていたと推定できる。奥の山古墳はくびれ部近くに位置する後円部の造り出しに配置が推定される。主体部との関係および墳丘外の配置についても不明である。舟塚古墳は前方部造り出しに家を中心として騎馬を含む武人集団・大刀・巫女・舞踏集団、前方部前端より数頭の馬形埴輪の配置が復元されている⁽⁷⁵⁾。組成は盾持ち、蒙古鉢形冑を被る例を含む挂甲着用の男子、靱を負う男子半身像、襷がけの女子半身像、帽子を被る男子頭部、家がある。エジリ古墳では周堀での出土位置から西側くびれ部から前方部北西コーナーまでの間に配置されていたと思われる。この組成を同時期の塚廻り4号墳と比較してみると、塚廻り4号墳例の2組の男子半身像と馬形埴輪がそのままエジリ古墳例の2組の騎馬と男子半身像となり、跪座の男子が共通している。大刀を持つ襷がけの女子はエジリ古墳例での2個体の意須比着用の女子と対応し、捧げ持つ女子はエジリ古墳では欠落している。また、エジリ古墳では特殊な髻を結った人物2個体が加わる。飾り帽子の男子と塚廻り例の帽子を被った男子が対応するかどうかは微妙である。天冠の男子は塚廻り4号墳例の椅座の男子と同列に扱うのは躊躇せざるを得ず、貴人級の人物も欠落していることになる。エジリ古墳の跪座の男子も故人の遺徳を称えている姿なのであろう。

雷電神社跡古墳例は個体数の差こそあれ新田町二ツ山1号墳⁽⁷⁷⁾にみられるような基壇において馬形埴輪が列をなす配置と同様と思われる。通常馬形埴輪の配置の範疇に入るものであり、群馬の埴輪配置の流れから逸脱していないことが看取される⁽⁷⁸⁾。その中で騎馬の前に立つ人物のみ下げ美豆良に盛装しているのは、騎馬が他の馬形埴輪と若干異なった意味を付帯されていたことを窺わせる。また、舟塚古墳の造り出しの配置案が当を得たものとすれば馬形埴輪配置の新例となる

がなお検討が必要であろう。

円墳 立山山13号墳では形象埴輪が石室開口部左右の周堀から出土している。生出塚6号墳は周堀から埴輪が出土しているが主体部との関係、埴丘全体での位置は不詳である。東毛養護例も主体部や埴丘での位置関係など一切不明である。経塚1号墳は形象埴輪は周堀西側で集中して検出されている。主体部との関係は不明である。

経塚1号墳例は小破片で全体像をつかみ難いが、冠を被る男子が2個体、捧げ持つ女子が2～3個体、琴を弾く男子、軛をはめた盛装あるいは武装する男子が2個体確認でき、他にも男子や女子の破片が見られ、本来充実した組成であったことが理解される。

小結 前方後円墳や円墳でのこうした巫女、饗応する女子、歌舞集団、武人集団などで再現される儀式の中で、騎馬もある役割を持っていたのは当然のことであろう。また、性格は各々検討を要するが、冠を被る男子が鬼の枕古墳、エジリ古墳、経塚1号墳で認められる。これらの古墳の騎馬は1類および2類に属するものである。

さらに、雷電神社跡古墳での騎馬の前に立つ人物とエジリ古墳での騎馬とセット関係になる人物とでは明かな格差が認められる。この格差が騎馬類型による差なのか儀礼の内容の差等の他の要因によるのか現段階では判断し難い。

5 ま と め

(1) 資料の認識

まず第一に明確にすべきことは、これらの資料が「馬に乗った人物」の埴輪として人物埴輪の範疇に入るのか、「人物を乗せた馬」の埴輪として馬形埴輪の範疇に入るのかという問題である。騎馬の資料検討を行う際に馬上の人物の性格づけも重要となってくるのであろうが、それでは人物埴輪の範疇に入るのではないかという考えも生じてくるのである。

第4章の配置と組成の項で配置が判別している雷電神社跡古墳例や組成が明確なエジリ古墳例から騎馬は男子半身像とセット関係となり、かつ従来の馬形埴輪の配置からの逸脱はみられないことが確認された。このように配置や組成の判るまとまった資料はわずかではあるが騎馬は他の馬形埴輪と基本的に大きく変わるところは見られないのである。しかし、人物部分も3分類でき、雷電神社跡古墳例で騎馬の前に立つ男子半身像のみ盛装しているのは馬形埴輪が騎馬ゆえであり、人物が乗ることによる意味が付帯していることも指摘した。このことから、騎馬の人物部分が馬形埴輪の属性のなかでも重要な位置を占めていると理解できる。

現時点での限られた資料からではあるが、配置と組成から騎馬は馬形埴輪の一形態とみることができ、人物部分は騎馬の重要な属性として捉えられるのである。

(2) 4類の検討

さきに行った4つのタイプのなかで資料上の制約があるにもかかわらず明確に他の属性と区別できたのが4類であった。4類は馬装も人物もひとときわ特異な類型である。この特徴的な類型を詳しくみてみたい。

馬装Ⅲは馬形埴輪のなかでもかなり少数派の装備である。群馬県でいえば120遺跡から約220個体の馬形埴輪が管見に触れているが、馬装Ⅲは可能性も含めてわずか5遺跡ほどである。⁽⁷⁹⁾埼玉県でも約60遺跡から5例確認されているのみである。その意味は飾られない馬も儀式に参加させたという説がある。⁽⁸¹⁾手綱は両手綱と片手綱があり、両手綱は東毛養護例のように人が乗るための馬装であり、片手綱は人が馬の前に立って引く「引き綱」である。騎馬の場合はどれも両手綱である。鞍も鐙もないこの馬装は御する者の熟練さを窺わせる。

馬上の人物は東毛養護例は美豆良もなく、伝茨城県例も桃割れあるいは剃り込みの表現はあるものの美豆良の剥離痕か耳の剥離痕が微妙なところである。帽子を被っているのも頭髪や美豆良表現がないというわけでもない。このような人物表現は通常の人物埴輪の中にも少数ながら見いだすことができる。群馬県藤岡市旧平井村462号墳は下郷古墳群に属する横穴式石室を持つ規模不詳の円墳である。この古墳から偶然の機会に男子半身像2個体、馬形埴輪1個体が出土している。⁽⁸²⁾このうち1個体が右手を挙げる所作をしており、頭髪表現や美豆良が認められない資料である。頭側部には円形の剥離痕があるが、明確に穴が開けられているところから耳と考えられる。腰に巡る帯の他は服飾表現はみられない。背には帯にさす鎌かと思われる粘土が残存している。馬形埴輪とセット関係になると思われる。また、埼玉県行田市酒巻14号墳出土埴輪のなかで馬の前に立つ男子半身像が美豆良も頭髪表現もない人物である。同県本庄市御手長山古墳出土の男子半身像は首に丸玉飾りをしているがやはり美豆良や服装の表現がみられず、後の腰に鎌と思われる粘土がある。⁽⁸⁴⁾また、エジリ古墳の騎馬とセット関係になる2個体の男子半身像が伝茨城県例の人物部分と類似している。群馬県伊勢崎市出土の男子半身像も美豆良のない資料である。⁽⁸⁵⁾茨城県岩井市出土資料も同様で、単体で知られる資料は他にもいくつか散見される。

さらに4類の人物を特徴付けるのは何物かを背負っていることである。この背負い物は伝茨城県例は完全に剥離しており、東毛養護例は表面が剥離しているため本来の造作を知ることができない。伝埼玉県資料も一部剥離がみられるが最も原形に近いと思われ、肩庇付冑といわれていたものであるが、最近では「荷物」という解釈もされている。確かに庇にあたる部分が不明確であり、割れ口を見せている部分を庇とすると赤彩が何を表現しているのか解釈がつかない。より検討を重ねなければならない。

通常の人物埴輪で背負っているものをみると、靱、赤ん坊、角杯が挙げられる。靱を負う人物は舟塚古墳男子、前橋市今井神社2号墳男子、高崎市綿貫観音山古墳男子、埼玉稲荷山古墳人物、茨城県東茨城郡茨城町出土男子、太田市出土挂甲の男子等が挙げられる。太田市出土例以外は半身像である。赤ん坊の例は鶏塚古墳の女子があげられる。角杯の例は和歌山県井部八幡山古墳の男子を挙げることができる。⁽⁹⁴⁾背負い物はそれぞれ特徴的な形状をしており、円形及び長方形を呈する4類の背負い物と比べると赤ん坊と角杯は候補からはずされよう。靱は長方形部分が本体となり、背板が人物の背と間隔をおいて張り出すとすれば可能性は残される。しかし茨城県東茨城郡茨城町神谷10号墳出土の人物埴輪では右側に胡籬をつけて左腰には大刀を帯び、さらに肩紐を

有して背中に剝離痕が認められる。胡籙と鞆を併用する事は考えられず、この人物の背負い物は鞆ではない可能性が高い。このような例から、背負い物を背中にあるが故に単純に鞆と即断する事は危険であろう。まして、4類の3例が三様の背負い物をつけている可能性も考えなければならぬのである。

これまでみてきたように特異な形状の人物埴輪は馬の前に立つ半身像や単体で知られる腰に鎌を差す男子半身像という階層的に下位の人物に類例が求められた。背負い物をする例は、鞆が多いせい武器武具を帯びる人物に多く認められることが指摘される。さらに、このことから少なくとも4類の騎馬と1・2類の騎馬はその役割と意味において相違が予想されるのである。

(3) 出現とその背景

5世紀中葉～後半の人物、馬をはじめとする動物埴輪の出現はそれまでの家や器財中心の組成や配置と全く異なるものであった。群馬県においても大泉町高德寺東古墳⁽⁹⁶⁾や群馬町井出二子山古墳⁽⁹⁷⁾で人物、動物埴輪の出現がみられる。これは群馬県のみではなく、千葉県内裏塚古墳⁽⁹⁸⁾や福岡県塚堂古墳⁽⁹⁹⁾など若干の時間のずれはあるにしろ全国的な動きであった。この後、埴輪はこのままの組成で消滅まで続いていくわけではなく、やがて器財埴輪の中にも変化が認められる。6世紀に入ると蓋や盾を中心とした組成から大刀や柄、鞆、翳が出現し、やがて蓋、盾を凌駕して器財⁽¹⁰⁰⁾の中の中心となっていく動きが見て取れる。埴輪は停滞したまま消滅していくのではなく、常に新しい要素が加わり、幾度かの変化を遂げていったのである。

こうした埴輪の流れの中で人物、動物埴輪の組成のひとつの小さな変化として騎馬が馬形埴輪⁽¹⁰¹⁾の中から出現してくると考えられる。出現の背景としては、乗馬の風習の浸透が挙げられる。さらに埴輪で再現される儀礼の中で主たる行為のなかではなく副次的な行為であっても「馬に乗る」という行為がなされていたと推定される。しかし、騎馬がごく少数であることは乗馬の行為が行われる儀礼が少数であったことを物語っていると思われる。そして、形象埴輪の造形は基本的には受注生産であることを考えると、被葬者あるいは被葬者集団の馬との関わりやこだわりがあったのではないかと感じさせる。

(4) 位置付け

第4章で騎馬の分類を試みたが、分類に使用した馬装Ⅰ～Ⅲは従来の用語に置き換えれば、馬装Ⅰは飾り馬であり、馬装Ⅲは裸馬である。詳細な検討は別の機会に試みることにするが、馬装Ⅱもここでは飾り馬の範疇に入れておきたい。従来の馬形埴輪の分類も馬装によっていることは明白であるが、騎馬にも飾り馬と裸馬の両者がある。これは騎馬という領域が人物を乗せているか否かで決定づけられているからであり、馬装を基準とする分類とは本来なじまないものである。騎馬という領域に対応する用語を用いるとすれば人物が乗っていない場合に用いる「空馬」ということになる。これまで行われている馬装からの分類に位置づければ、騎馬は飾り馬、裸馬それぞれのバリエーションとして捉えられるのである。さらに、4類の検討から1・2類との役割や意味においての差違の可能性を指摘したが、飾り馬の意味や裸馬の存在の意義を探究研究が

なされているように、飾り馬での騎馬（1・2類）と裸馬での騎馬（3・4類）は付帯されている意味や役割が異なっている可能性は高いといえよう。

6 お わ り に

これまでみてきたようにごく少数ながら騎馬の存在が明確である以上、その確認に注意する必要がある。馬形埴輪の小破片であっても障泥での人物の足の剥離痕の有無、鞍での剥離痕等に留意すれば確認は容易であろう。人物埴輪の破片でも共伴する他の人物埴輪より極端に小型の資料や下腹部前後に剥離痕があったり足が開いていたりすれば騎馬の人物部分となる。今後の類例の増加が期待される。

本稿では騎馬に対する基礎的データの抽出に努めたが、果たし得なかったことも多い。たとえば4類については若干検討できたが1～3類については触れられなかった。残存状況も良好とはいえ、資料の制約上古墳や副葬品等を含めた検討もなし得なかった。同様に配置や埴輪組成についても充分とはいえないところがある。さらに、今回の資料から騎馬を馬形埴輪の範疇に含め出現の系譜をそこに求めたが、人物埴輪を起源とする別系統の騎馬が存在するか否かが大きな課題であろう。類例の増加を待って再検討してみたい。

最後に、本稿をなすにあたり多くの方々のご協力、ご指導を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

赤崎敏男、飯島義雄、近江昌司、太田博之、置田雅昭、樫田誠、木津博明、斉藤新、坂口一、志村哲、白石真理、杉山秀宏、徳江秀夫、戸潤幹夫、塚田良道、松村一昭、南谷恵敬、山内紀嗣、山口逸弘、山崎武、石川県立歴史博物館、四天王寺宝物館、天理大学附属天理参考館、小松市教育委員会

註

- (1) 南雲芳昭「東毛養護学校所蔵の馬形埴輪について」『研究紀要』9 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (2) 松原正業『埴輪』創元社 1958
- (3) 日本陶磁協会『陶説』7月号 1960
- (4) 東村村誌編纂委員会『佐波郡東村の古墳』1969
- (5) 天理大学附属天理参考館『はにわ』資料案内シリーズNo.8 1971
- (6) 大塚初重・小林三郎「茨城県舟塚古墳Ⅰ・Ⅱ」『考古学集刊』第4巻1・2号 1968・1971
- (7) 村井嘉雄編『古代史発掘7 埴輪と石の造形』講談社 1969
- (8) 永峯光一、水野正好編『日本原始美術体系3 土偶・埴輪』講談社 1977
- (9) 群馬県立歴史博物館『群馬のはにわ』1979
- (10) 猪熊兼勝編『日本の原始美術6 埴輪』講談社 1979
- (11) 名古屋市博物館『古墳時代の馬具』1985
- (12) 八女市教育委員会『立山山13号墳』1984
- (13) 甘木市教育委員会『鬼の枕古墳』1987
- (14) 宮崎由利江『「裸馬」の埴輪に関して』『埼玉県の考古学』新人物往来社 1987
- (15) 鴻巣市教育委員会『鴻巣市遺跡群Ⅱ』1987
- (16) 埼玉県教育委員会『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』1989
- (17) 梅沢重昭「群馬出土の埴輪馬」『群馬歴史散歩』第98号 1990
- (18) 井上裕一「馬形埴輪の研究—製作技法を中心として—」『古代探叢Ⅱ』1985

- (19) 若松良一「東日本の動物埴輪 南関東」『はにわの動物園 関東の動物埴輪の世界』 榎原考古学研究所附属博物館 1990
- (20) 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』9 雄山閣 1992
- (21) 前掲註(1)
- (22) 小松市教育委員会『矢田野エジリ古墳』 1992
- (23) 岐阜市博物館『はにわ物語』 1993
- (24) 会津板下町教育委員会『経塚古墳』 1993
- (25) 天理大学附属天理参考館『古墳時代の武器・武具・馬具』天理ギャラリー版 1993
- (26) 前掲註(13)
- (27) 前掲註(12)
- (28) 朴廣春「伽耶・九州の竪穴系横口式石室の源流について」『古代朝鮮と日本』古代史論集4 名著出版 1990
- (29) 江上波夫・佐原 真『騎馬民族は来た・来ない』小学館 1990
- (30) a 前掲註(16)
- b 増田逸郎「埼玉古墳群と円筒埴輪」『埴輪の変遷—普遍性と地域性—』北武蔵古代文化研究会 1985
- (31) a 埼玉県『新編埼玉県史』資料編2 1982
- b 村史編さん室『図説大里村の歴史』 1985
- c 若松良一・山川守男・金子彰男『諏訪山33号墳の研究』 1987
- (32) 前掲註(15)
- (33) 埼玉県教育委員会『埼玉稲荷山古墳』 1980
- (34) a 前掲註(5)
- b 天理大学附属天理参考館『第19回企画展 古墳時代の武器・武具・馬具』 1992
- c 前掲註(25)
- なお、置田雅昭氏のご厚意により資料を実見することができた。
- (35) 前掲註(25)
- (36) a 前掲註(4)
- b 松村一昭「雷電神社跡古墳」『群馬県史』資料編3 1981
- (37) 松村一昭氏からご教示を受けることができた。
- (38) 前掲註(1)
- (39) a 斉藤忠「群馬県太田市高林古墳群」『日本考古学年報』3 日本考古学協会 1955
- b 梅沢重昭「中原古墳」『群馬県史』資料編3 1981
- (40) 前掲註(39) b
- (41) 太田市教育委員会『群馬県太田市沢野村63号墳』 1968
- (42) 木暮仁一「『綜覧』沢野村102号墳」『群馬県史』資料編3 1981
- (43) a 前掲註(9)
- b 榎原考古学研究所附属博物館『はにわの動物園 関東の動物埴輪の世界』 1990
- (44) 前橋市教育委員会『後二子古墳』 1992
- (45) 前掲註(9)
- (46) 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録 古墳遺物編 (関東Ⅰ)』 便利堂 1980
- (47) 前掲註(46)
- (48) 前掲註(6)
- (49) 行田市博物館『海をわたってきた文化』 1991
- (50) a 前掲註(2)
- b 前掲註(5)
- なお、置田雅昭氏のご厚意により資料を実見することができた。
- (51) 前掲註(5)
- (52) 茨城町神谷古墳群発掘調査会『茨城町神谷古墳群』 1993
- (53) 大塚初重・小林三郎『茨城県馬渡における埴輪製作址』 明治大学考古学研究室 1976
- (54) 埋蔵文化財研究会『形象埴輪の出土状況』 1985
- (55) 茨城県史編さん原始古代部会『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 1974
- (56) 後藤守一・斎藤 忠・大塚初重・川上博義『三昧塚』 1960
- (57) 大平遺跡群調査会『茨城県大平古墳』 1986
- (58) 前掲註(46)
- (59) 前掲註(46)
- (60) 前掲註(22)
- 資料の実見に際して榎田誠氏にお世話になるとともに資料に対しての詳細なご教示を受けることができた。
- (61) 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第2巻第4号 1997
- (62) a 赤塚次郎「尾張としての埴輪製作者」『考古学の広場』第1号 考古学フォーラム 1983

- b 赤塚次郎「尾張型埴輪について」『池下古墳』 愛知県埋蔵文化財センター 1991
 c 小栗明彦「埴輪倒立技法の問題」『史学研究集録』第17号 國學院大学 1992
- (63) 樫田誠氏からご教示を受けた。
- (64) 石川県立郷土資料館『郷土資料館だより』 1974
 戸潤幹夫氏のご厚意で資料を実見させていただいた。
- (65) 中司照世「北陸」『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ埴輪 雄山閣 1992
- (66) 前掲註(24)
- (67) 前掲註(5)
- (68) 前掲註(5)
- (69) 前掲註(5)
- (70) 前掲註(46)
- (71) 前掲註(57)
- (72) 前掲註(57)
- (73) 津金沢吉茂・飯島義雄・三宅孝子「群馬県藤岡市本郷埴輪窯跡出土の埴輪について」『群馬県立歴史博物館紀要』1号 群馬県立歴史博物館 1980
- (74) 佐藤行哉・後藤守一「鶏塚古墳発見の埴輪」『考古学雑誌』第21巻第9号 1931
- (75) 前掲註(6)の記述をもとに次の文献で復元案が示されている。 埼玉県立さきたま資料館『はにわ人の世界』（「古墳時代の研究9」に再録） 1988
- (76) 群馬県教育委員会『塚廻り古墳群』 1980
- (77) a 清水潤三「群馬県新田郡二ツ山古墳」『日本考古学年報』1 1948
 b 新田町・新田町誌刊行委員会『新田町誌』第2巻資料編（上） 1987
- (78) a 右島和夫「東国における埴輪樹立の展開とその消滅—上野地域の事例を中心として—」『古文化談叢』第20集（下） 1987
 b 南雲芳昭「群馬県における馬形埴輪の様相」『成塚石橋遺跡Ⅱ』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (79) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「神保下條遺跡」 1992 および前掲註(78)b
- (80) 宮崎由利江「埼玉県内における馬形埴輪の消長」『考古学資料館紀要』第5輯 國學院大学 1989 および前掲註(14)
- (81) 前掲註(14)
- (82) 志村哲氏からご教示を受けた。
- (83) 行田市教育委員会『酒巻古墳群』 1988
- (84) 本庄市教育委員会『御手長山古墳発掘調査報告書』 1978
- (85) 前掲註(23)
- (86) 前掲註(46) なお、神奈川県厚木市登山1号墳の坊主頭の全身立像は前述の男子半身像とは別の系譜を考えている。
 厚木市教育委員会『登山1号墳出土遺物調査報告書』 1992
- (87) 前掲註(6)
- (88) 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』 1986
- (89) 群馬県立歴史博物館『群馬県立歴史博物館常設展示解説』 1987
- (90) 前掲註(33)
- (91) 前掲註(46)
- (92) 前掲註(9)
- (93) 前掲註(74)
- (94) a 和歌山市教育委員会『井辺八幡山古墳』 1972
 b 入江文敏「角杯形土器小考」『網干善教先生華甲記念考古学論集』 1988
- (95) 前掲註(52)
- (96) 山武考古学研究所『古海松塚古墳群』 1993
- (97) 後藤守一「上野国愛宕塚」『考古学雑誌』第39巻第1号 1953
- (98) 前掲註(54) 内裏塚古墳からは馬形埴輪は未確認だが供給元の畑沢埴輪窯跡で確認されている。
- (99) 福岡県教育委員会『塚堂遺跡』Ⅰ 1983
- (100) 前掲註(79)
- (101) a 小林行雄「上代日本における乗馬の風習」『史林』 34—3 1951
 b 小野山節「馬具と乗馬の風習」『世界考古学体系3 日本Ⅲ』 1977